

shitsurai

「しつらい」

特集

昭和と
ジェンダー



8

vol.8 2020

文化・住環境学研究所報

第 8 号発刊に寄せて

文化学園大学の付属研究機関の一つである文化・住環境学研究所は、2004年に住環境をめぐる研究を推進するために設立されました。研究所の名称にある「住環境」とは、「住」をとりまく自然・文化・社会環境の意味も含まれます。このため、研究所の活動もいわゆる「住居」のみならず、人間の生活行動を包摂する文化や環境を含めたもの、すなわち生活環境を対象としています。つまり、異なる領域を横断する学際的な研究を重視している点が特徴です。

現在研究所では、生活環境の向上ならびに造形教育手法の開発をテーマとして、学内外の研究者による共同研究を推進するとともに、若手教員による研究活動の活性化を支援しています。これらの研究成果は、各種学会での発表のほか、隔年で発行する研究所報『しつらい』に掲載し、広く社会に公開し還元してまいりました。そしてこの度、無事に『しつらい』第8号を発刊する運びとなりました。

本号には2017年度から2018年度までの研究所の活動内容がとりまとめられています。また、創刊以来、各号において生活環境を見直す多様なテーマを設定し、これに関連する本学教員による研究・制作活動、鼎談及び座談会を「特集」として紹介しております。

本号の特集のテーマは「昭和とジェンダー」です。グローバル化が進む今日、異文化理解は不可欠です。それは日本で育まれた伝統や文化への理解を深め、尊重することでもあります。「令和」に変わったからこそ、ここでは「平成」を飛び越えあえて「昭和」とは何であったのかを、「ジェンダー」という切り口から識者に語っていただきました。今回の特集が、日本の造形文化の未来を再考する契機となれば幸いです。

このたび『しつらい』第8号に掲載いたしました多岐にわたる研究活動報告に、皆様のご意見ご感想をお寄せいただけましたら幸いです。より豊かな生活環境づくりに向けての更なる研究を深める場として、本研究所の活動に、今後ともご指導とお力添えをくださいますよう、よろしく申し上げます。

文化・住環境学研究所 所長 高橋正樹

目次

1 第8号発刊に寄せて 高橋正樹

特集

昭和とジェンダー

3 令和の時代に紐解く！ 昭和カルチャー再考論

屋間行雄×田中里尚×種田元晴 進行：深田雅子

14 昭和の色彩

大関 徹

研究 助成 報告

16 1 新素材繊維を用いた空間演出の実践(2016-2017年度)

岩塚一恵(建築デザイン研究室)

17 2 造形教育を活用した学外活動の試み(2017-2018年度)

嘉松 聡(絵画研究室)・鳥海 薫(造形・色彩学研究室(2018年度))・七里真代(造形・色彩学研究室)
近藤静香(ニット作家)・滝本 徹(株式会社東横イン元麻布ギャラリー)

18 3 長野県須坂市における古民家再生プロジェクトに関する研究報告(2017-2018年度)

渡邊裕子(建築デザイン研究室)・佐藤百合子(染織研究室)・高橋正樹(インテリアデザイン研究室)
牧野 昇(メディア・映像研究室)・北岡竜行(絵画研究室)・井上揺子(アトリエノット)
伊藤丙雄(東京工科大学)・本郷信二(東京工科大学)

20 4 高齢期女性の居場所における収納システムの提案(2017-2018年度)

浅沼由紀(建築デザイン研究室)・星野茂樹・白井 信・山崎裕子(グラフィック・プロダクト研究室)
長山洋子(Y O O インテリア研究室)・井上揺子(アトリエノット)

21 5 美術教育普及活動での映像メディアの効果的な活用方法(2017年度)

屋間行雄・加藤美紀(メディア・映像研究室)

22 所員の主な活動一覧

32 編集後記 深田雅子

特集 昭和とジェンダー

令和の時代に紐解く！

昭和カルチャー 再考論



映像メディア
昼間行雄

ファッション
田中里尚

建築
種田元晴

× ×

進行

深田雅子

昼間行雄



本学デザイン・造形学科教授。東京造形大学造形学部デザイン学科映像専攻卒。テレビ番組や博物館展示映像の企画演出、自主制作の実験映画やドラマも多数。日本映像学会、日本アニメーション学会会員。著書に『映画は楽しい表現ツール』(偕成社)など



深田… 今日はお集まりいただきありがとうございます。令和の時代が始まってもうすぐ半年になりますが、今日は昭和とジェンダーをテーマに各方面の先生にお集まりいただいて、昭和を振り返っていいこうと思います。進行は昭和63年生まれの深田です。

り上げています。もう一つの研究としては日本映画の中で、とくに日本の家庭の描き方がどのように変わってきたのかに注目して調べています。昭和のテレビドラマ、山田太一や倉本聰といった脚本家の家庭の描き方と、昭和の終わり頃から始まったトレンドドラマ*注1における家庭の描き方の違いにも注目しています。

田中里尚



本学ファッション社会学科准教授。立教大学大学院文学研究科比較文明学専攻にて、博士(比較文明学)号を取得。2007年度に本学助教、2011年度より現職。著書に『リクルートスーツの社会史』(青土社)、『現代文化への社会学』(共著・北樹出版)。



深田… 最後の世代です。

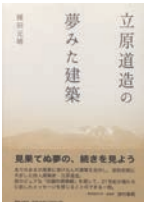
種田… 建築デザイン研究室の種田です。僕は日本の近代の建築の歴史について調べているんですけど、建築そのものというよりは建築家のことを調べていて、建築家が何を考えてその建築をつくったのか、自分が生きている世界って誰がつくって誰が何を考えて今の状態が出来ているのかに興味があります。日本の建築家だと都庁をつくった丹下健三さんが主役になりますが、その友人に立原道造という詩人がいます。彼は詩人としては有名ですが、建築学科出身だったので丹下健三と親交がありました。立原は若くして亡くなるんですが色々な建築家に影響を与えていると思われるので、その辺りをちゃんと調べようと思いあまり書いていない人がいなかったので博士論文にまとめました。色々な研究方法があると思いますが、僕は文献研究と同時に、建築家が描く透視図から建築家が何を考えていたのか読み取ろうという絵画の分析のようなことをやっています。だんだん昔のことを知っている人が少なくなってきたので、最近は戦後の建築家にインタビューをして回り貴重な証言を集める活動をしています。80歳以上の

田中… 服装学部ファッション社会学科の田中です。専門はファッション雑誌、「婦人」雑誌、女性雑誌を史料にした歴史研究をしています。博論では昭和初期から高度経済成長直前までの女性雑誌における主婦像を研究しました。戦前に理想だった主婦のイメージが戦後に標準となり同時に標準というのが理想化されていく逆説的な歴史の有り様を追究しています。先日『リクルートスーツの社会史』という本を出して、それもまさに理想的だったものが標準化する一方で、標準であることが理想として機能しだすという戦後の問題を描こうとしたものです。

種田元晴



本学建築・インテリア学科助教。建築史・意匠・図形科学。昭和期日本の建築家群像に関心。著書に『立原道造の夢みた建築』(鹿島出版会)、『建築』という生き方(共編著・南風舎)、『世界建築史15講』(分担執筆・彰国社)など。



昼間… メディア・映像研究室の昼間です。主に映像制作の実習授業を担当していますが、講義では「マンガ・アニメーション論」と昨年まで「サブカルチャー論」という授業も担当していました。戦後に発達した日本のサブカルチャーの中でもとくにアニメーションの歴史や、作画表現の変化などを授業で取

進行 深田雅子



本学デザイン・造形学科助教。



文化服装学院円型校舎
『近代建築』1955年11月号 p2

人たちに「あなたはその時何を考えてそんなものをつくったのですか」と聞いて、僕や僕より下の人たちがその思いを受け継いでいけるような、受け継いでいなくても良いんですけど、それを何らかの形で参照できるように公開していくという活動を同時にしています。せっかくこの学校に入ったので最近文化服装学院円型校舎*注2のことを調べて学内紀要に投稿しまして、それも作家論としてやっています。

深田…作家論、面白い視点ですね。

種田…建築家論ですね。作品は建築家の頭の中にあったものの一部が出てきているものだから、その人のことを調べればその建築のことをもっとよく理解できるんじゃないかという意味で、どちらかという人間のことを調べています。

昼間…文化服装学院の円型校舎は、昔からかなり目立った建物だったらしいですね。動画映像に写っていないだろうかと映画やテレビドラマなど、今色々探しているんです。

一同…へー！

昼間…意外とあります。新宿を舞台にしたテレビドラマなら写っているんじゃないかと思って、まず『太陽にほえろ!』を観てみました。1970年代に作られた回では、京王プラザホテルの前で、車が甲州街道方面に移動するカットに写り込んでいました。東宝の堀川弘通

監督の映画『白と黒』*注3(1963)には、文化服装学院円型校舎が大きく写っています。大学の校舎(現在のD館)建設中の頃なので、工事の砂利が道路に積んであったり、まだ京王線が地上を走っていたので、校舎の手前に電車の架線柱が写っています。

種田…それは見ないといけないですね。

深田…当時円形の建物はブームだったんですか？

種田…その話して良いんですか？
1954年から59年の間に日本全国に円形校舎が出来まくるんですよ。100校以上あったといわれています。それをほとんど手掛けているのが坂本鹿名夫(さかもと かなお)という建築家で、彼が日本全国に円形校舎をつくりまくるんですね。それをみんな真似する訳です。円形建築って大体3・4階建てなんですけれど、同じ面積に対して周りの長さが一番短い形が円なんです。そうすると壁の数が少なくて済む。壁の量が一番少なくて済むので経済的ですよ。だから経済性を追求した形なんです。戦後に児童が増えて授業が一教室で取らず音楽室など普通教室以外の部屋を利用してました。これを解消するために新しい校舎をつくらうとしましたが戦後お金がない中でつくらなきゃいけないということで発明されました。円形校舎のブームは5年で終わりますが、最初にできたのが1954年で、文化服装学院の円型校舎は1955年なんで

*注1

トレンドドラマ

1980～90年代頃、時代の流行を取り入れた若者向けドラマシリーズの総称。バブル期の東京に住む若者を描写し、恋愛や不倫といったストーリーが中心。ゴールデンタイムに放送され、もともと視聴率の取れる主婦、OL層をターゲットとした。1986年の『男女7人夏物語』が最初と言われる。人気タレントや女優が高価なインテリアを備えた高級なマンションに住んでいるか、おしゃれなロフトや郊外の閑静な住宅で生活している設定が多く、出演者は常に流行のファッションをまとっている。メーカーとのタイアップで画面に登場する衣装やアクセサリなどが放映後に流行するといった、視聴者に対するカタログ的な役割も果たした。1991年の『東京ラブストーリー』は、「主人公を死なせないでほしい」という女性視聴者からの手紙がテレビ局に殺到するほどの人気を博した。男性に向けたストーリーから、女性に向けたストーリーに転換したことが、昭和と平成のドラマ作りの違いである。

*注2

『文化服装学院円型校舎』

本稿では、文化服装学院の校舎を表す固有名称のときは「円型」を、そうでない一般名称では「円形」を用いることで統一している。理由は複数あるが、長くなるので、詳細は種田の論考「文化服装学院円型校舎の形態構成と空間構造に関する研究」(文化学園大学紀要第51集、2020年3月)を参照されたい。

*注3

『白と黒』

大学の校舎(D館)は、1963(昭和38)年2月に着工、11月に完成した。この映画の制作も1963年なのでまさにこの工事の時期に撮影されていることがわかる。画面を通り過ぎる学生たちはコートや羽織っているもので、撮影は2～3月頃に行われているのではないだろうか。建設中の校舎は画面のフレーム外にあるが、工事の音が効果音として大きく入っている。



*注4

二本立て興行

同時上映とも。元はアメリカの映画興行の方法で1929年の大恐慌による動員数減少に対向するシステムとして誕生した。日本映画は、新作の封切りでは、上映時間が約1時間30分間の新しい作品を2本組み合わせて上映していた。封切り興行が終わった映画を上映する2番館、3番館という映画館や、名画座と称する独自のプログラムを組んで過去の作品を複数本組み合わせて上映する映画館も存在し、ホームビデオ普及以前の映画好きが足繁く通った場でもあった。上映時間が2時間の超大作映画であっても、2本立て興行は1970年代まで行われていたが、1976年に角川映画第一作『犬神家の一族』が洋画と同様の1本立て興行を行って大ヒットしたことで、邦画各社も1本立て興行に変わった。

すけど、あれは坂本鹿名夫じゃなく三菱地所の設計です。坂本鹿名夫の建築を見てこれは素晴らしいと思って真似した人がいっぱいいるんです。文化服装学院の円型校舎は本人の許可を得て真似してつくっているんですけど、高層階でエレベーターが入ってるし、高級な材料を使っているし、坂本鹿名夫の考えているのと違うんです。だから全く別物なんです。

田中…僕は当時の教室の形を覚えていないのですが、円の中心の側に黒板が配置されていたのですか？

種田…そうです。劇場と一緒に円形を分割すれば扇型に教室が並びます。扇型の小さい方に黒板があれば声が拡声します。中央にエレベーター、その周りに廊下、教室という並びです。扇型にすると一番廊下が短くて済みます。一般的に学校って横長じゃないですか。横長の建物は廊下の面積を結構とります。

深田…どうして文化服装学院円型校舎はなくなったんですか？

種田…増築できないからです。上に積めるけど積む前提でつくっていませんし、四角だったら横に伸ばせますけど、円は直径を広げないといけなから、だから解体したんだと思います。



劇場、カセットテープ、昭和の娯楽の楽しみ方

深田…昭和の時代に流行った劇場の形などありましたか？

昼間…内装の話になりますが、大昔の映画館は座席じゃなくて敷敷というか、分けられた畳に座っていたところから始まっているのですが、それがずっと維持されていた映画館があったり、ロビーが結婚式場のような豪華な作りであったり、上映前に場内でシャンデリアのような豪華な照明が点灯するとか、今のシネコンのような無味乾燥としたものでなくその時代その時代の特徴がありました。私が映画館に通うようになってから、どこの映写が良いとか音響が良いとか、映画好きの口コミで、劇場に対する評価が広がっていました。有楽町にあったテアトル東京という劇場はスクリーンがものすごく大きくて前方の席に座ると弓なりに画面が広がって左右が見えないワイド感で、観客は画面内に居るような気になりました。どの映画館で観るかというのを楽しみにしていた人が多かったですね。シネコンだどこで観てもおんなじですよ。

種田…オールナイトや同時上映とかあったんですね。

昼間…日本の場合ですけど、長らく映画は二本立て興行*注4でした。お客さんを入れて稼ごうと映画と、おまけじゃ



ないですけど併映という形でもう1本を組合せて上映するスタイルでした。今のシネコンみたいに入れ替え制じゃないので、途中から観て、途中まで観たところで帰るという文化があったんですよ。

田中…寄席っぽい感じですよ。

昼間…その時代の人たちはそういう見方を普段からしていたみたいで、親の世代がそうなんです。親に最初に連れて行ってもらったのが『ダンボ』*注5(1941)と『くまのプーさん プーさんとはちみつ』(1966)の2本立てだったんですけど、上映時間にきっちり行かないんですよ。入るともう始まっているクライマックスあたりから観る訳ですよ。それが一巡して次のクライマックスまで来たところで出ていっちゃったんですよ。

深田…昼間先生の親御さんの世代という？

昼間…昭和3年生まれで、今91歳ですね。日常に映画館があった時代でするので観られる時に観て、今のように上映時間を選んでからチケットを買うということをしないう時代でした。

田中…僕が最初に映画館に行ったのは、小学校一年生に入ったかどうかの時期に東宝で上映された『ドラえもん のび太の恐竜』(1980)だったと思いますが、大宮駅東口の南銀座といういかがわしい繁華街にあった映画館で

も、すでに入れ替え制でした。非常口の灯りが煌々と光っている中で見た記憶があります。僕は1974年生まれなので、物心ついた時には既にテレビが娯楽になっていました。クリスタルキングの「大都会」や寺尾聰の「ルビーの指環」をカセットテープ録音して、聴いていた世代です。中学校2年生ぐらいの頃に8インチCDが出て、テープからCDへの変化を経験しました。僕の中で昭和というとカセットテープですね。メタルテープ*注6で他のカセットからダビングすると音質が悪いか、小中学校の時に色々試しましたね。

深田…メタルのカセットテープってどういったものですか？

昼間…磁性体の主成分がFe、鉄なんです。元々カセットテープは酸化鉄で、メタルは磁力が強く音質が良いと言われていたんですけど、対応している高級デッキでしか使えなくて安価なラジカセは対応していないので逆に音質が悪い。一番すぐ無くなったのはメタルなんです。残っていても磁性体の劣化はどうか、錆びちゃってるんじゃないでしょうか。

昭和のジェンダーを ファッション、建築、 映画から考える

深田…平成の時代はジェンダーについて盛んに叫ばれて活動が起こったり

*注5

『ダンボ』

ディズニーの『ダンボ』の日本での初公開は1954年。本文中での上映は1967年に行なわれた2回目の公開。

*注6

メタルテープ

オーディオ・カセットテープのTYPE IV規格。アナログ・テープの時代は、いかに音質を落とさずにレコードからテープに録音するかがオーディオ・マニアの話題であった。再生側と録画側の二つのデッキを備えたダブルカセットレコーダー登場後は、マニアでなくてもテープからテープへの音声コピー（ダビングと称した）をして、お気に入りのテープを作るのが流行した。テープメーカーは磁性体を工夫して音質の向上をアピールした製品に力を注いだ。鉄を主成分とする磁性体のTYPE IV（通称メタルテープ）はマニア向けの高級な製品として登場したが、デジタル・オーディオの急速な普及で短命に終わった。この時に実用化された蒸着によるテープ製造技術は、後の家庭用デジタル・ビデオテープの製造に大きく貢献することになる。



「スカート丈を短く」
『ミセス』1967年1月号 p14

***注7**

リクルートスーツにはなぜパンプスが必須なのかという議論

女性のリクルートスタイルは、00年代初頭以降、黒のベーシックなジャケット、膝丈タイトスカートないしはパンツ、レギュラーないしはスキッパータイプの白いシャツ、A4サイズの入るバッグ、黒いパンプスという構成に収斂していった。スタイルは標準化され、男性のスーツスタイルと近似してきたが、靴だけは、ヒールを残したパンプス（ヒモや留め金などをつかわず、ローカット [甲革を低くったもの] の靴の総称）着用が維持されたままとなっている。しかし、このパンプス着用の根拠は明確ではなく、80年代より健康被害の指摘も多くあり、現在も「#KuToo」などの批判が表明されている。しかし、一方で、パンプスは他者への礼儀であるとか、背を高く見せる効果があるので美しいとか、パンプスに足を通すと身が引きしまるとか、様々な意見が提示され、パンプス以外の履き物を自由に選べるとは言い難い状況が続いている。

SNSを通じて世界中にメッセージが拡散されたりしていましたが、昭和の頃は どうでしたか？

田中…1961年に創刊された雑誌『ミセス』では、1962年ぐらいまでミセス（既婚者）がミニスカートを履くのははしたないと語られていましたが、65年ぐらいから徐々に、むしろ機能的だからミニスカートをこそ穿きましょうと語られるようになっていきました。ミニスカートというアイテムは男性的な視点ではエロチシズムの表現と解釈されることが多いですが、穿いている側はそうした意味を発信しているわけではない。男女のまなざしの差が、あらわになるアイテムですね。

深田…女性からしたらミニスカートは活動的ですし、田中先生も著書『リクルートスーツの社会史』の中でパンツスーツについて書かれていますが、実用的だから取り入れられて理想が現実が変わっていった気がします。

田中…70年代のテレビに登場するアイドルは、結構際どいスカートを穿かされていた印象がありますが、社会の中ではどう思われていたのでしょうか？

昼間…当時、夏にはアイドルが勢揃いする芸能人水泳大会の番組があったんですが、水泳競技の間で、男性アイドルは海パン一枚、女性アイドルはワンピースかビキニ姿で歌って踊るのが定番でした。世間的にはアイドルというのはそのような仕事をする人なんだという

認識があったので、露出度が高い衣装に対して目を背けることはなかった気がしますね。

田中…令和ですと、昭和のビールの広告のように、露出度が高い衣装を着た女性のポスターを公の場に置くこと自体が、女性を性的にまなざす見方を男性が自然なものと認識してしまう装置になっていると批判されます。男性側からするとそれは行き過ぎなのではないかと思いがちですが、女性側からすると、それがずっと当たり前のように行われてきたこと自体をもうやめてほしいと思うわけですね。こうした、《見る - 見られる》をめぐる非対称性に対する議論がTwitter上では日々繰り広げられています。僕の本で例えるなら、リクルートスーツにはなぜパンプスが必須なのかという議論*注7と同じで、男性は綺麗に見えるし他人に対する礼儀じゃないかと言うけれど、履いている女性側からするとそれを自然=当たり前だと思っっている男性の見方自体に問題があると。事実レベルの非対称性と認識レベルの非対称性の議論が、錯綜しているのです。

深田…かつて会社で働く女性は、男性のサポート役、引き立て役であり、且つ華も必要と色々求められていましたね。

田中…これは採用基準をめぐる言論において公然と言われていた話ですけど、女性は過剰にオシャレだったり、性的でありすぎたりすると、他の女性社



員と見栄の張り合いから不和が生じてしまったり、男性社員の生産性が下がってしまったりする。しかし、全く無味乾燥に存在していても面白くないから、適度に綺麗に着飾ってくれというダブルバインドが課されていました。昭和の男のわがままで許されていたものが今は社会問題化しています。

深田…映画監督・建築家は今も男性の仕事という印象があるのですがいかがですか？

種田…最近はどここの学校も建築学科は優秀なのは女子ばかりで男子のパワーがなくなってきています。女子学生は元々男しかいない業界にやってきているからモチベーションが高く、戦っても男ではそもそも勝ちようがないという話もあります。建築の業界が男社会だったということを今の建築学生はあまり気にしていないけど、男子学生についてはいつか仕事を全て女性に奪われるかもしれないという危機感を持って4年間を過ごして欲しいです。女子学生たちは男の業界に飛び込んでいくという気概で勉強していますから。今、大手ゼネコンの現場は女性社員を多く採用しています。現場では長時間そこで仕事をするので、例えばトイレをつくらなければいけない。男だけの現場なら男子トイレ一つで済むのに女性がいると二つつくらなければならない。はっきり言ってコストはかかりますが、それでも女性の方が優秀だと企業もわかっているの女性を採りたいんです。だらしない男が入ってくるよりも優秀でやる気がある

危機感を持った女性がいてくれた方が良いでしょう。ライオンだと狩りをするのがメスでオスは何もしていないとも言いますが、そんな状況でしょうか。

田中…僕も妻に口喧嘩で勝ったことはないです。

種田…うちも完全にカカア天下です。ところで夫婦が別の寝室で寝ることが問題であるとかつては考えられていました。60年代末黒沢隆が「個室群住居」*注8を言い始め、寝る部屋・食う部屋を分けているのに夫婦は一つの寝室であることについて、家族なんて別々の個体なんだから全部別々の部屋にすれば良いじゃないかと言い、実際に建築をつくったんですけど時代が早すぎて社会に受け入れられなかった。なぜ受け入れられなかったかという、夫婦が別々に住むなんで世間バレたらやばいと思ったからです。でも今やそんなの当たり前ですよ。夫婦なんて別々に住んでいてもいいし、お父さんとお母さんが一緒に部屋で寝ないという家庭も増えています。

田中…反対に今はリビングも一緒にして子供部屋も作らないで一緒に勉強するという風潮がありますよね。

種田…2010年ぐらいからですね。個室だけでなく居間などにも勉強スペースを設ける「ノマド式勉強法」*注9などと言います。子供部屋をつくと籠もって勉強しません。我々も研究室に戻っても勉強できないのでカフェに行って勉

*注8

「個室群住居」

建築家の黒沢隆(1941-2014)が1960年代後半に提唱し、1970~80年代に実践した、核家族のための新しい住まい方の提案。それまでの近代住居の特質は、黒沢によれば、「単婚家族」のための「夫妻の一体的性格」によって営まれる「私生活の場としての住居」であった。急速な高度成長を果たし、世界有数の経済大国となった当時の日本では、働き手の需要の増大に伴って、女性の社会進出が目覚ましくなった。それまでのように、父が母の分まで働いて稼ぎ、母は父の分まで家事をして、そして、父と母はともに寝るといった「夫妻の一体的性格」を前提とした家族像が崩れ始める。さらに、1960年代の黒沢は「性愛と生殖の分離の傾向」が強まると言っており、LGBTなど性の多様化が進むことすらも見越していた。そうして黒沢は、夫妻の性愛の場である主寝室や団欒の場としての居間が主体の住居ではなく、父も母も子もそれぞれが独立しながら共同生活を営む個室が主体の住居を提案し、後進の建築家に多大な影響を与えた。その思想を体現した代表作には、「武田邸個室群住居」(1970)や「ホシカワ・キュービクルズ」(1977)などがある。



***注 9**

「ノマド式勉強法」

2006年に刊行された四十万靖・渡邊朗子による『頭のよい子が育つ家』（日経BP）の中で提唱された勉強法。ノマドとは遊牧民のこと。すなわち、本書では、個室に籠って勉強するよりも、家の中の様々な場所を転々と巡りながら勉強する方が、たとえば、各所に貼りこんだ知識をその場所のイメージとともに覚えることができるし、気分転換にもなるし、また、家族とのコミュニケーションから多様な学びや気付きを得ることもできるわけで、つまり、知識だけでなく考える力を養成することができるのだということを、難関中学受験に成功した複数の家庭への聞き取りとその聞き取りを示しつつ語られている。本書がベストセラーとなり、さらに、スマートフォンが普及して「ノマドワーク」とよばれる働き方が見られるようになったこともあって、2010年代以降、都市には「ノマド」がたゆとうようになった。

***注 10**

ディンクス

DINKs(Double Income No Kids)のカタカナ表記。1980年頃、米国で作られ一般化した言葉。共働きで子供を（あえて）持たない夫婦を指す。

強するじゃないですか。誰かが見ている環境の方がやりやすいというんですね。そういうスペースをわざとつくる建築家もいます。映画の話をするとな津安二郎が戦後すぐに大家族の崩壊を描いていますね。その後森田芳光が『家族ゲーム』で核家族の崩壊を撮りました。よく建築家もこれらの映画を見ろと言われます。その後黒沢清の『トウキョウソナタ』では戸建て住宅での核家族の崩壊が描かれました。さらに言えばディンクス*注10などいろんな家族の形があり得るよねとなってきている。2010年代以降はシェアハウスが目立って家族ってよくわからなくなっています。確かに昭和初期と昭和の終わり頃は、大家族、東京物語、家族ゲームに代表されるようなある程度型のある家族が登場していますが、それが今では描けなくなっていることが建築も映画も共通していると思います。

深田…映画から家族の形を辿るのは面白いですね。

種田…よく「建築家は映画監督に嫉妬する」と言われます。結局映画監督は理想の世界を描けるけど、建築家は様々な制約の中でやっています。だから本当に建築家になりたければ映画監督になった方が良いと言われるくらい建築家は暗い商売だと思っている人もいます。だから建築家は自分の仕事のために結構映画を観ています。

深田…映画と建築の意外な繋がりが見えてきましたね。



昼間…映画の中での男女の描き方ですと、小津安二郎の『秋刀魚の味』*注11（1962）のシナリオを読むと、出演者のおじさんたちの年齢が57歳とかの設定なんです。僕とほぼ同じ年齢なんだけど、画面ではものすごく老けて見えるんですよ。『秋刀魚の味』は父親が娘を結婚させる話なんですけど、その当時とはとにかく親戚のおばさんが縁談を持ってくるとか、どんどん周りが女性に結婚を勧めるんですね。周りもそれが当たり前だと思っているし、会社の中でも女子社員に対して男性の上司が「あなた今おいくつなの?」「もう結婚しなきゃ」みたいな会話をする訳ですよ。今だったら大変な話になりますけど、当時はそれが日常の時代だったのです。小津作品以外でも当時の映画には、亭主が帰宅後脱いだ服は女性が片付けるのが当たり前という場面が描かれている。けど当時は普通だから観客はなんの疑問も持たない。今見るとこういう時代だったんだよと気づかされます。

田中…今だったらネット上で「夫の服片付けるのがほんと苦痛でしょうがないんだけど」って叩かれますよね。

昼間…「マンガ・アニメーション論」の授業では、『新・おばけのQ太郎』（1971）を題材にしてそのページに何が描かれているか書き出ささいという課題を学生に出すんです。そこには、日曜の夕方みんなが外出先から帰ってくる場面があります。各自で服を着替



えたら、次のコマではもうお母さんはエプロンを着けて台所で料理をしている。お父さんは丹前に着替えてタバコを吸いながら座布団の上で新聞を読んでいる。今だったらこのような描き方は出来ないと思います。昔はそれが普通の家族の姿だったので作者はそう描いただけだと思うんですね。

種田…家庭内の役割が変わったこともあると思います。女性が本気出したら男は勝てないというのに女性が気付いたからだと思うんですね。僕も日常生活の中でどうやっても勝てないという場面に毎日出くわします。それに女性が気付いたから「何新聞広げてくつろいでいるんだよ」となりますよね。

昼間…例に出した『秋刀魚の味』では、先ほど話に出たカカア天下の様子が、佐田啓二と岡田茉莉子が演ずる若夫婦のシーンで描かれています。奥さんが財布を握っていて、欲しい中古のゴルフ道具も買えなくて旦那はふてくされているという、尻に敷かれている旦那像。それが笠智衆が演ずる親の世代とは違う、新しい世代として小津は意図的に描いていることがうかがえます。

田中…ちなみに、小津作品の中で文化出版局の『装苑』って出てきますか？

昼間…記憶にないですねえ…。小津作品でブティックを経営しているデザイナーが登場する（『お茶漬の味』1952）とか、主人公が洋裁学校の先生をやっている設定の映画があります

（『秋日和』1960）ね、既製服が少ない時代ですから。小津作品の女優が着用している服は、当時の日常のファッションだったのでしょうか。とても素敵に着こなしている。小津の作品での和服は、その柄を小津自身でデザインしたそうです。かつては『装苑』の表紙になっていたのは女優さんばかりでしたね。

田中…ファッションはかなり日常に近いスタイルだと思います。『装苑』は1936（昭和11）年の4月に創刊されていますが、「婦人には、やはり在来の和服の方がふさわしいと云う、国粹的見地からの考え」があるけれども、「これは誤り」と述べています。むしろ「我国は、古来世界のあらゆる文化をとり入れたが、すこしも自性を害しないで日本化」できているのだから、「どんな事物でも包摂して、生成発展」するのが「日本国体の本領」と述べます。そして、「挙止動作に不活発な在来の和装は禁物」であり、「社会的に経済的に活動」するには、上記の国体が存在するのだから、「今日では、純然たる日本服の一様式となってしまう」洋服も、決して国体に反することは無いのだと主張して、洋裁教育を普及させていきました。***注12**この論理は、明治政府が洋装を取り入れるにあたって、中国から服制の流入してきた奈良朝の以前の服装に復古するに過ぎないという、洋装に批判的な勢力を説得した「自然」を元にした論理と同じですね。

***注11**

『秋刀魚の味』

小津安二郎監督、1962年に松竹が製作・配給した映画。小津の遺作となった本作品は、娘を嫁がせる父親（笠智衆）の孤独と、家族が世代ごとに別々な生活を始めていく様を描いた作品である。本作が同様な題材の『晩春』（1949）と異なるのは、岩下志麻が演じる娘や岡田茉莉子が演ずる妻たちが自分の意思を堂々と述べる快活な姿である。全編を通して軽妙な喜劇的な味付けがなされている本作だが、しかし、岸田今日子のママがいるバーのシーンだけは異様だ。加東大介が演ずる「帰還兵」の男が軍艦マーチのレコードをかけて敬礼をしながら行進をするカット（まるで死者が乗り移ったかのような無表情の加東の顔!）と、これに続く入口の天井に赤いライトが点滅するカット（こちらはシナリオには書かれていない）が編集されたこのシーンにこそ小津のメッセージがあるのではないだろうか。

***注12**

以上の引用は杉本正幸「國體精神の復興と夫人の洋装」『装苑』（1936年5月）から



*注 13

『20世紀少年』

浦沢直樹が描いた漫画。1999年～2006年まで『ビッグコミックスピリッツ』（小学館）にて連載された。その完結編『21世紀少年』は2007年1月～7月まで連載され、これを原作とした映画『本格冒険科学映画 20世紀少年』が2008年から2009年にかけて3部作として公開された。作中では「太陽の塔」をモチーフにした塔が象徴的に登場し、21世紀の東京に万博会場が復活した。作者である浦沢直樹も1970年の「大阪万博」に行けなかった。「行った人は夢破れ、行けなかった僕は夢が続いている」。自らの中で永遠に終われない万博とどう向き合い、伝えていくのか。この思いが約30年後に『20世紀少年』の執筆につながったという。 <https://www.sankei.com/west/news/170102/wst1701020012-n2.html>

*注 14

『1984年』

（原題：Nineteen Eighty-Four）

英作家ジョージ・オーウェルによる1949年に刊行された小説。独裁者として君臨するビッグブラザーが支配する管理社会を描いた。アメリカでは反共産主義のバイブルとしても扱われた。なぜかオーソン・ウェルズが作者だと勘違いしている人が多い。

種田…どこまでを伝統と考えるかですね。建築も同じで、明治時代に「法隆寺はギリシャのパルテノン神殿を参照している」と言った人がいるんですけど、結局伝統も突き詰めればシルクロードを介して古代ギリシャ・ローマまでいく。

今欲しいのは 昭和のおおらかさ

田中…昼間先生は1964（昭和39）年開催の東京オリンピックは見ておられますか？

昼間…僕は1961年生まれだから見えています…。じつは、正確にはリハーサルを…ですが。親戚のお兄ちゃんが聖火ランナーの集団に選ばれたので、土砂降りの雨のなか親の背中に背負われてリハーサルの応援に行ったのを覚えています。

田中…1970（昭和45）年の大阪万博には行かれましたか？

昼間…当時小学校3年生で、行きたくて行きたくて仕方がなかったです。切手、コインとか万博のいろいろなグッズが出ていて集めましたよ。東京でも買えました。パビリオンの建物がすごかったのでガイドブックを読んで覚えたりしていました。当時東京と大阪は家族と一緒にでないと行けない距離だったんですけど、なんと父親が会社の慰安旅行で万博に行っちゃったんです。だからもう

行かないとか言い出して行けなかった。ものすごく愕然としました。悔しくて仕方ないからイメージを膨らませました。

田中…小学生が大阪万博に行けたか行けなかったかで分岐する未来*注13は、まさに浦沢直樹の『20世紀少年』のテーマですね。僕もファミリーコンピュータをしばらく買ってもらえませんでしたけれど、買えないながらも攻略本を熟読して同級生よりも内容を覚えておりましたし、もう頭の中ではゲームをクリアしていました。このような、「ない」ことがもたらす濃密な時間性が、昭和を象徴するものかもしれません。

種田…ファミコンがある家は神々しかったですね。

深田…今の小学生ってゲームセンターに行くのでしょうか？

種田…行く必要ないんじゃないですか。無料アプリで十分楽しめますよね。大家族時代の間取りから核家族の間取りになり今は個室群住居が珍しくなくなったので、電子機器の発達・使われ方と空間は関係あると思います。古い小型テレビが使われなくなって仕舞われているのを見つけると、なんとかアンテナを合わせて自分の部屋で観ようとしていました。不自由な中にどうにか努力してなんとか目的を達成するための努力を惜しまないというのをやらざるを得なかったけど、今はそんな努力しなくてもなんでも簡単に手に入っちゃうから、それが昭和と今の違いだと思います。ラジオ



から録音した曲のタイトルがわからなくても、ググれないからヒントがわからないんですよ。それでも必死になってどうにかして探るといふ努力がありましたね。

田中…そういう「欠如」を何かで埋めなければという意識が強かったと思います。

種田…見えないものを見たい、わからないものを知りたいとか、簡単に答えが出ないことを想像する力を今の学生たちは持ちにくいかもしれないですね。何でもすぐ見れちゃうので、想像力を働かせて何かを考えることを今の人たちに要求することは難しいし、要求する必要がないので、想像することが必要だった世代の人と、しなくても良い世代の人では全く考え方が違うと思います。そのせいか今は自然な想像力を働かせることを許さない窮屈な時代になってきていると思います。想像に留めるなら良いけど表現してはいけない、というような。心の中に秘めておいて表には出さず、出すならアングラにやりなさいというように、やばい世界が出来上がっている気がします。人間が人間らしくいてはいけないと言われている訳ですから。

田中…ジョージ・オーウェルの描く『1984年』*注14 感が出てきましたね。

種田…新宿二丁目の方は元々は警察公認の赤線でしたけど、ゴールデン街は非公認の青線ですね。かつての日本には欲求不満な人たちが犯罪者にならないように警察黙認・公認の風俗街があったわけですね。今は黙認どころ

か世の中全部が監視されていて、はけ口も逃げ場もなくなっちゃって、かなり危ないことになっています。もうちょっと昭和的なおらかさがあった方が良いと思います。



新宿ゴールデン街 クラクラにて
住所 〒160-0021 新宿区歌舞伎町1-1-9

昭和の色彩

造形・色彩学研究室 大関 徹

昭和前期

1926～1940年代（昭和元年～20年代中期）

自由な色彩から、軍国主義の統制色へ

昭和は、1923年の関東大震災からの復興と大正デモクラシーの延長線の中から始まった。東京、横浜では、震災後の帝都復興事業によるビルが建ち、大都市圏ではデパートの興隆、上下水道の整備、電気製品、ガス・電気の普及といった都市化が実現していった時代である。

昭和時代のごく初期は、1925年前後のフランスでの「アール・デコ」の洋風色彩が多く受け入れられた。「モボ・モガ」と称された当時のおしゃれな都会派ヤング（写真1）や、銀座三越のポスター（写真2）に描かれている人物の洋風ファッションにその影響が強く表れている。また、建築では、新宿伊勢丹本店、東京都庭園美術館（写真3）、自由学園明日館の建物やインテリアにもアール・デコ様式が採られている。

アール・デコは、それ以前のアール・ヌーボーの手工業時代に別れを告げ、後の工業化時代の初期の様式といえる。機能的形態、幾何学的装飾、新素材のガラス、金属を多用し、色では、白・黒・金・銀に、赤・黄・緑・青などの高彩度色が特徴的である。しかし、日本では軍国主義の台頭により、華美を排する社会動向とともに、色彩はやがて禁欲的モノカラーの中に沈んでいった。

戦時中、政府が定めた服制の色彩に国防色がある。1940年に公布され、色は「茶褐色」と定められている。黄土色～カーキ色（マンセル表色系の概ね3.5Y4.5 / 4）に相当する。定められた国民服は男性用で、女性用には「婦人標準服」があった。戦後の洋装化を促進したと言わ

れるが、婦人標準服はあまり普及しなかった。女性はもんぺ姿、地味な着物に白い割烹着が一般的であった。

空襲を受けた都市では、がれきの中を国民服、軍服、もんぺ、割烹着が行き来するという色彩風景であるから、例えば、花のような鮮やかな美しい色は目立ち、希少な憧れの色となる。戦後の焼け野原にその色をもたらしたものがファッションの「アメリカンルック」であった。

色彩的視点でいえば、まずは、衣料品の色彩から戦後日本が始まったといえるが、アメリカンルックの色彩は人々の「所有欲」を大いに刺激した。色は、赤、緑、黄、オレンジなど原色が多く、これらの中でも特に鮮やかな赤（フレームレッド）と緑（ビリヤードグリーン）が人気を得たという記録がある。

昭和中期

1950年代～1960年代（昭和20年代中期～40年代中期）

高度経済成長と繁栄を映す派手な色彩の氾濫へ

日本は、1950年代後期には高度経済成長時代に突入した。1970年の大阪千里での万国博覧会に至るまでの期間は、物の所有を次第に実現し、豊かな生活を手にした時代である。食・衣の順に生活を充実してきた人々は、住の分野である住居、家電、室内装飾品などにもようやく手が回るようになっていった。

家電では、1950年代後半の憧れの「家電・三種の神器」と呼ばれた白黒テレビ・洗濯機・冷蔵庫に始まり、1960年代半ばには「3C」と言われたカラーテレビ、クーラー、自動車へと移行している。これらに当初取り入れられた色は、家具調の木質色、家電の白である。特に白は洋風高級感を醸し出す色として人気を得た。

繊維分野では、「蜘蛛の糸よりも細く、鋼鉄よりも強い」と言われたナイロンやポリエステル繊維のテロンなども開発され、合成繊維による衣料品が多く市場に出回った。



（写真1・左）ピーチパジャマに麦わら帽のモガ（1928年）
（写真2・中）銀座三越 四月十日開店（1930年）東京国立近代美術館
photo:MOMAT / DNPartcom
（写真3・右）東京都庭園美術館旧朝香宮邸として1933年に完成

合成繊維には天然繊維の染色では得られない透明感があった。これら新製品の色として人気を得た色が、1960年代初期を席卷したライトカラーの「シャーベットーン」(写真4)である。

シャーベットーンは、ファッション製品を中心に、化粧品、工業製品、洋菓子の分野までを巻き込んで、当時の大流行色となった。ライトカラーには希望、幸福感などを与える効果があるが、まさしく、高度成長期初期の色として人々の心理と同調した色彩であったと言える。

1960年代中期には、好景気の中、エネルギッシュなイエロー、レッドオレンジ、イエローグリーンといった原色調の色が人気を得(写真5)、ファッション、家電、車、インテリア製品にいたる生活製品全般にわたる人気色となり、1968年頃からは、さらに過激な蛍光色やマルチカラー使用の「サイケデリックカラー」人気へと変化していった。

高度成長期の強い色は、戦後の憧れの色、そして物質的豊かさのステータスを象徴する色彩でもあった。

昭和後期

1970年代～1980年代(昭和40年代中期～60年代)

自然回帰、エコロジー、グローバル化の進展とともに

思慮深い色彩へ

好景気のピークに開催された1970年の大阪万国博覧会から3年後の1973年から、第1次オイルショックにより、わが国は一転して不景気へと転落した。ここに高度経済成長は終焉を迎え、未曾有の不景気に見舞われた。自然回帰の流れが強く表れ、これまでの原色調色彩から、茶色を筆頭とした地味な色彩へと人気色が一転した。「不景気になると茶色や灰色が流行る」とはファッション界の通説だが、流行の要因はTPOが幅広く、無駄のない色だからである。1970年代の大ヒット色は茶色で、「アースカラー :earth color (大地の色)」と呼ばれ、衣服だけ

でなくインテリア、車(写真6)や家電品などにも広がった。その他、ベージュ、灰色、カーキ色、黒など低彩度色や無彩色人気が見られている。

1980年代に入ると、特に電子機器の発展が著しく、「軽薄短小」と言われた機器がもてはやされた。その代表がソニーのウォークマンであった。さらに、1985年の筑波科学万国博覧会に前後し、情報化社会到来の下、シンプル、ミニマルなデザインが世界的な動きとなった。

インテリアでは、「ハイテック(Hi-Tech)」と呼ばれた工場のような無機能的・機能的インテリアが流行し、白・黒・シルバー・赤のシンプルなコーディネートが人気となった。ファッションでは、山本耀司、川久保玲がパリコレで黒いファッションを発表し、黒が世界的人気色となった。1970年代が土のような有機的色彩だとすれば、1980年代は、機能的な無機的色彩の時代といえる(写真7)。

1980年代後期以降はバブル経済に浮かれる風潮と共に「エコロジー :ecology」という自然環境保全のグローバルな視点がデザインに反映されるようになり、1970年代を彷彿とさせる再度の自然回帰への動きの中で昭和時代が終えている。

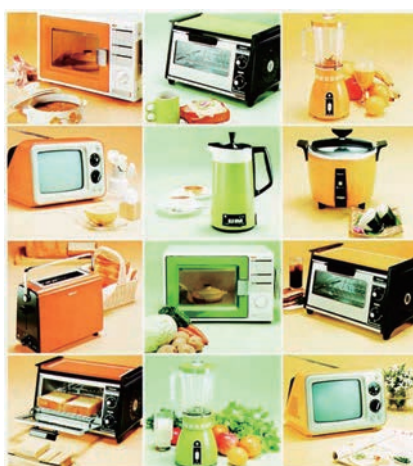
昭和後期の色彩は分野を問わず「コーディネート」が念頭に置かれている。つまり、地味な飽きのこない色をベースに、その他の色を付け加えて時代のトレンドを楽しむという考え方である。無理、無駄を省き、「組み合わせ」という知的な作業によってスタイルを創り出す態度である。いわば、より思慮深い色使いが定着したということになる。

昭和という時代を概観すると、単品に重きを置く考えから、全体性とバランスに重きを置く発想へと、より賢い消費性向が色彩にも如実に現れている。

昭和は戦後の人々が目指してきたよりよい生活のありようを実現した時代と言える。「俺が俺が」のエゴではなく、昭和以降の現在に通じる共生的思考がモノの在りように対しても描ける心を築いた時代と言えるだろう。



(写真4)シャーベットーン(1962年)資生堂のポスター 株式会社資生堂/企業資料館蔵



(写真5)1970年代の厨房家電のカタログ: Panasonic (家電品は1970年代中期まで原色調が多く使われた)



(写真6・上)1970年代の車体色の茶色 (写真7・下)1980年代のブラックインテリア(展示会より)

1 新素材繊維を用いた空間演出の実践 (2016-2017年度)

岩塚一恵
建築デザイン研究室

本プロジェクトは、近年開発が目覚ましい新素材繊維を用いた空間演出の応用可能性を見いだす事を念頭に、特殊機能繊維を用いた空間演出の制作実験について報告する。

新素材繊維として、特に紫外線など特殊波長の光を照射している間変色、発光するもの、気温によって色が変わる繊維の開発が進んでいる。しかしながらこうした機能を活かしているのは服飾・防災分野が主であり、新しい分野での可能性を示す必要性を感じていた。

今回は特殊繊維の中でも蓄光機能を持つ繊維を利用し、空間演出に活かす方法を模索した。蓄光とは、日光、蛍光灯、紫外線ランプなどの光エネルギーを吸収蓄積し、そのエネルギーを自発的に長波長の光として放出する性状を指し、この過程を何度でも繰り返す性質を持つ。主成分は希土類(きどるい rare earth elements)と呼ばれる数種類の無機物を人工的に加工したものである。蓄光は電源が不要であることから、災害時等に機能することが想定されており、現在非常用誘導看板としての用途が最も多い。近年の災害に対する関心から、東京都では都条例にて蓄光式標識の表示を義務付けている。また近年では医療用の製品も開発されている。一方、難点として急な暗転が得られない屋外での効果が期

待出来ないことが挙げられる。

今回はサンエス株式会社CELLAN蓄光糸の事例について報告する。CELLAN蓄光糸は糸表面に、蓄光(夜光)顔料をコーティングすることで糸自体が光を発する。光の強さ、照射時間、糸同士の密度による反射によっても発光強度が異なる点が特徴である。蓄光顔料自体の色味はクリーム色が主流であり、元の糸の色に大きな影響は与えず、発光すると緑、青、オレンジ等に発光する。空間演出で多用される暗転や照明の変化、パフォーマンスなどの影響によって様々な発光効果が期待できると予測し、今回は昼光では白、暗闇で緑に発光する糸を使用した。

糸の加工に際しては、一般的に流通している編み物の手法を応用し、細い糸を複数本撚りながら編むことでお互いの反射発光を促すことに成功した。実施事例として、農村舞台アートプロジェクト(2016年愛知)、紀の国トレイナート2017(和歌山)での空間演出にCELLAN蓄光糸を使用した。(図1、2)

本実験を通じて、柔らかく可変性のある空間演出のひとつの可能性を見出した。特に、織り、編みといった手法を用いることで強度と審美性を兼ね備える点も及第点に達することができた。今後も新素材繊維の活用方法に着目したい。



図1：蓄光糸に光を照射する様子*
*共に紀の国トレイナート2017

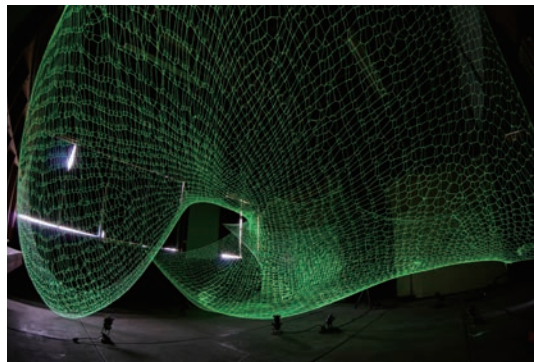


図2：蓄光糸が発光している様子*

2 造形教育を活用した学外活動の試み (2017-2018年度)

嘉松 聡
絵画研究室

近藤 静香
ネット作家

鳥海 薫
造形・色彩学研究室(2018年度)

滝本 徹
株式会社東横イン元麻布ギャラリー

七里 真代
造形・色彩学研究室

この活動は、学外活動を通し、社会で求められる能力とされる「対応力(相手に応じた態度)・コミュニケーション能力(互いに意思や感情・思考を伝達し合うこと)・適応力(環境に適するように行動や意識を変えていく)」などを学生に体感してもらうことが目的のひとつである。活動内容は麻布十番商店街の株式会社東横イン元麻布ギャラリーとの連携による、学生主体のワークショップである。ワークショップは2014年に試行し、翌2015年度からは麻布十番商店街の8店舗に協力していただき、地域密着型こどもワークショップとして、2018年度で4回目の実施となった。

このワークショップでは、モビール制作を行っており、参加者の年齢は3歳から12歳である。2017年度は色紙で作った型紙に各協力店舗の写真を貼ったものと絵を描いたものと毛糸のポンポンを用いてモビールを制作した。2018年度は木目込み細工の技法を用いた球体や布張りの型紙に協力店舗の写真を貼り付けしたものでモビールを制作した。2016年度までは学生の役割はワークショップ当日のスタッフであったが、2017年度以降は企画と事前準備の段階から参加する内容へ変化している。

ワークショップの事前準備では、子供達が制作に必要なパーツを自分の好みで選択できるよう用意し、

年齢差、技量に応じた補助パーツなども用意する必要があるため、学生の積極的な行動力が必要となる。

また、ワークショップの当日は「協力店舗での写真の撮影」「モビールの制作」「協力店舗への飾り付け」等の工程があるため子供達とのコミュニケーション能力、対応力、適応力など、通常の授業とは異なる多くの能力が必要とされる。

2017-2018年度ワークショップ後の学生へのアンケートでは「学外活動は良い経験になる」「興味がある」と考えつつも「自発的な活動をするまでには至らない」といった消極的な回答があった一方で、「積極的に参加できた」「子供とのコミュニケーションがとれたか」の項目に関しては「良くできた」の回答が2015-2016年度アンケートより多くあった。この結果は学生の役割を増やすことが達成感の向上につながったと推測でき、学外ワークショップは学生の様々な能力向上に一定の効果があることを示している。今後は、学生同士がワークショップの引き継ぎをし、継続的に参加する活動にしていきたいと考えている。

最後に今回の造形教育を活用した学外活動を通し、学生が自発的に学外活動を行うきっかけとなることを期待する。



3

長野県須坂市における 古民家再生プロジェクトに関する研究報告（2017-2018年度）

渡邊裕子
建築デザイン研究室

佐藤百合子
染織研究室

高橋正樹
インテリアデザイン研究室

牧野 昇
メディア・映像研究室

北岡竜行
絵画研究室

井上 瑠子
アトリエノット

伊藤丙雄
東京工科大学

本郷信二
東京工科大学

須坂市仁礼に建つ古民家を拠点に、古民家所有者、須坂市及び地域の人々の協力のもと、未来の暮らしを探る目標を掲げ、古民家の改修とものづくりワークショップを続けて2019年で10年目になる。2014年度から作業効率の向上を図り、合宿を1年に1回、4泊5日に集約し、古民家改修と地元の方とのワークショップを行う方法にした。2016年からは古民家が地元の人々に慣れ親しまれる場となることを願って懇談の場を設けることにした。

2014-15年度の改修は、台所の拡張であった。その結果、床面積が2倍以上、外部との出入り口は土間の手前と奥の2カ所から可能になり、作業効率が格段にアップした。床板張りや土壁塗りのような修繕に比べ、誰の目にも明らかな空間の変化は、部外者にも関心をもって見られる効果があった。ワークショップ企画は染色、凧づくり、木製スプーンづくりなど本校と東京工科大学の教員の専門分野を活かして行った。

<2017年度の活動>

2012年に蘇らせた土間が凸凹のため三和土を施した(写真1)。土間に繋がる入口付近に古い瓦を木端立てし舗装した(写真2)。そして活動初年度

に張った座敷の床の合板を、杉板に張り替える作業を完了させた(写真3)。作業としては、左官職人の竹前氏が練ってくれた土を少しずつ土間に敷きながら専用の木槌で叩く、半分に切った瓦を埋め込む分の土を掘る、床板に釘を斜めに当て打ち付ける、などどれも同じ姿勢を長時間続けるため、かなりの重労働であった。しかし三和土にモザイクタイルを埋め込む時や瓦の木端立て方を思案する時など、学生は真剣だ。土はすぐに乾かないのでうまく出来たのかどうか疑心暗鬼であった。来年も参加して見届けたい、と何人かがつぶやいていた。

ワークショップはお馴染みになった地元の方に郷土料理を教えて頂き、お返しに染織研究室佐藤の指導の下キッチンでもできる天然染色を行った。平行して座敷でおやきに具を入れ(写真4)、庭で焼いたニラせんべいやひんのべと一緒にランチをしながら古民家での経験を語り合った。染色は台所で玉ねぎと桜の葉を煮出した浸け染を、庭では藍の生葉染を試みた。自然から生まれる繊細な色に感嘆の声があがった(写真5)。別の日には子ども神楽の小学生楽士7名を連れた祭事保存会の方がみえ、神楽演奏と獅子舞を披露して頂いた(写真6)。2月に恒例の蔵の町並みキャンパス成果発表会にて合宿の報告を発表し、2017年度の活動が終了した。



写真1 土間の三和土



写真2 瓦の木端立て



写真3 杉板張り替え



写真4 おやき具入れ



写真5 玉ねぎと桜の葉の染め



写真6 子供神楽

<2018年度の活動>

2018年度の一番の修繕目標は、広縁（座敷の庭側にある廊下）の外側に、濡れ縁を作ることに決定した。古民家での食後などに、広縁に腰掛けて会話することが多い。しかし引き違い窓があるため、座る人と庭に立つ人とに分かれてしまうのが問題であった。濡れ縁の登場により、庭での作業や屋外での食事の場所が、より居心地よい環境となった。

指導して頂いた長野県木材青壮年団体連合会の方からは、「今まではあるものを修繕する作業だったが、今回は一から新たなものを創作することができ、作業時間も予定通りに終了し、大変よかった」とのお言葉をいただいた（写真7）。

ワークショップ企画は「手作り窯でオリジナルピザ作り」を行った。地元の方々12名の参加があった。ドラム缶で簡単にピザ窯を作ることが出来る予定であったが、金属加工時に出る火花が強く、学生達には難しい作業であった。オリジナルピザ制作は、各々自由に地元食材を使って作り、焼きたてのピザのおいしさを堪能した（写真8）。

もう一つの修繕活動は、前年度に施した土間の叩きの補修作業であった。前年度にモザイクタイルを散りばめた叩き土間を作ったが、冬の間にも関わらず土間が凍結し大きなヒビが入った。今回も左官職人竹前氏の指導のもと、ヒビに新たな練り土を詰めていく作業を行った（写真9）。

地域交流では、毎年ワークショップに参加される生涯学習促進委員会仁礼分会の皆さんが、昼食を提供するためにお越し下さった。2016年度に完成し

た台所で、下ごしらえしてきた食材を仕上げた。郷土料理三味のメニューは、笹寿司（笹の葉に載せた寿司飯の上に椎茸など煮しめた具が載っている）、ひんのべ（すいとん味噌煮）、胡麻味のだんごなど、郷土料理を伝える活動を続けている方々の手作りの品である。地元の若者もあまり食べた事がないという（写真10）。

そして、昨年度も披露してくれた子供神楽のメンバーが中学生に進学し、今年度は女子3名が大人の太鼓とともに笛の演奏を披露してくれた。神楽は7月に行われる御祭例に不可欠なもので、伝統を絶やさないう子供たちに伝えていく仁礼地区の方々の思いに襟を正す（写真11）。合宿前には、古民家の古くなったカーテンを捺染技法で新しく製作し、古民家に彩りを添えた（写真12）。そして2月に恒例の蔵の町並みキャンパス成果発表会にて合宿の報告を発表し、2018年度の活動が終了した。

今後もこのような活動を続け、信用を得る事で深く地元住人の方々と繋がっていく事を望んでいる。物質（ものづくり）で繋がる時代から、環境（場所づくり）で繋がる時代が変わっていることを強く感じる。改修については、階段を掛ける、廊下を繋ぐなど構想は尽きない。地元の方の場にもなるようにしたい。そのための懇親会が3年間に亘り行われたが、本音の話し合いにはまだ遠い。しかし2018年度には、古民家所有者の篠塚氏がカフェをこの古民家で開くなど、大学関係の合宿以外の用途にも使われるようになり、少しずつではあるが確実に田舎と都会の間にある未来の暮らしに近づけたのではないと思う。



写真7 濡れ縁



写真8 ピザ窯



写真9 三和土補修



写真10 郷土料理笹寿司



写真11 須坂伝統芸能



写真12 カーテン製作

4

高齢期女性の居場所における収納システムの提案

(2017-2018年度)

浅沼由紀

建築デザイン研究室

星野茂樹・白井 信・山崎裕子

グラフィック・プロダクト研究室

長山洋子

YOOインテリア研究室

井上 遙子

アトリエノット

高齢になるほど生活拠点として住まいの役割は大きくなり、特に「居場所」での過ごし方が生活の質(QOL)に与える影響は大きい。本研究は、高齢期女性のQOL向上に繋がる居心地のよい居場所の創出を目指し、モノの整理・収納の仕方・暮らし方について、「文化式システム収納家具」(以下、「文化式」)を用いて提案する。文化・住環境学研究所の学際研究(平成22～24年度)から派生したテーマの継続的研究である。

前々報・前報では、「文化式」を用いた収納システムの第三者評価並びに実空間での使用実験の結果を報告し、「文化式」が居場所でのモノの整理・収納に役立つことを確認できたが、いくつかの課題も抽出された。

2017年度・2018年度は、それら課題の検討を進めた。具体的には、①引出し収納において引出しの中身を容易に視認可能なサインのデザイン、②引出しの深さ・仕切り・材質(重さ)の再考、③「文化式」の全体容量の検討、である。そのうち、本報では①の検討結果を報告する。

収納場所を認識するためのサインとして、表示された絵文字が示す形状の意味や概念を直感的に認識させる視覚記号の一つ「ピクトグラム(絵文字)」を採用した。高齢期女性にとってできるだけシンプルで視認性の高いデザインを検討するため、収納実験及びアンケートを実施した。

実験で使用するピクトグラム制作に際しては収納するモノのカテゴリ化が必須である。プレ調査で身

近に置いておきたい最小限のモノを抽出し、使用頻度・重要度・種別で仕分けて11項目のデザインを制作した。

実験は、「文化式」のある住環境デザインモデルルームにて2018年本学文化祭期間に実施し、2日間で27名(50～80代、主に女性)の協力を得た。ピクトグラムをステッカーシート(32^{ミリ}×32^{ミリ})に印刷し、引出し前面左側に貼付した状態で、用意した物品(約200点)から無造作に選んだ数点をピクトグラムを頼りに収納してもらい、貼付したピクトグラムのサイズ感や認識しやすい配色、引出しの深さについても調査した。実験終了後には、ご自宅での収納状況、ピクトグラムの理解度や視認性、実験後の感想・意見をアンケートした。

被験者の反応は概ね好評で、ピクトグラムを認識しながら収納しようとする意識は働いていた。実験終了後のアンケートでも、ピクトグラムで収納するモノが想像できる(96%)、収納の内容群が引出し面に「絵」で表示されているとよい(78%)、と高い支持を得たが、家具に貼ることの抵抗やリビングで目に入ると寛げないとの意見や、人により仕分け先の異なる物品やカテゴリーの多さに迷うとの意見もあった。これらを踏まえ、ピクトグラムの形成モチーフ組合せと添え文字表記を改良し7種類とした。デザイン上は、使用頻度が高く、視覚的特徴があり認知度が高く、直感的イメージがしやすい品目をモチーフとし、「仕舞う」「取り出す」の日常的行動に繋げることを重視した。



本調査で使用した11種類のピクトグラム



収納実験



一番認識しやすく印象が良いと思う配色(調査結果)



本調査結果を踏まえて改良した7種類のピクトグラム

5 美術教育普及活動での映像メディアの効果的な活用方法

昼間行雄・加藤美紀
メディア・映像研究室

主に子供がワークショップ等で映像を制作する時の環境や機材について、美術教育普及の現場での効果的な映像の活用方法について研究を行った。

2017年度には、この共同研究の2015～16年度の活動をまとめた小冊子「映像教育普及研究」vol.1を発行し、学会等の研究会で配布した(写真1)。

また、小学校の図画工作の教員を対象としたアニメ作りのワークショップ「発見・体験!アニメーション」を4日間行なった(8月18日、25日、9月15日、29日)ので以下に報告する。

参加者は、「東京都図画工作研究会(略称:都図研)」にご協力いただき、小学校で図画工作を担当する教員に対してフライヤーを配布して応募した。その結果、都内の公立小学校10校から1名ずつ、計10名の教員の参加があった。

会場として、NPO法人市民の芸術活動推進委員会(CCAA)にご協力をいただき、その図工室をお借りした。そこにiPadを6台と設置器具など主にアニメを撮影する機材を持ち込んだ(写真2)。設置器具の制作では、本学非常勤講師の佐野真隆先生にご協力をいただいた。

アニメのワークショップの1日目は、絵が動いて見えるしくみを知るために、残像効果の実験や2枚の絵を作画して動かす「ぱたぱたアニメ」などを実習した。2日目は、コマ撮りしながら砂を少しずつ動かして絵を描き変えていく「砂アニメ」と、関節ごとに部品を作って組み合わせる切り絵の平面人形による「切り絵アニメ」の練習を行なった。3日目、4日目は、グループ制作で、砂アニメと切り絵アニメを組み合わせ、『鳥獣戯画』の一場面から動きを想像してアニメ化する作品作りを行なった。

このワークショップでは、参加した教員から、機材や用具が実用的か、図画工作の授業内で行なう場合の問題点があるかなどを聞き取り、感想をアンケート用紙へ記入していただいた。また実習の様子を複数の視点から記録した。

参加した教員からは、ワークショップの内容は、図画工作の授業に適していて、ぜひ行なってみたいという感想をいただき、他の技法のワークショップがあれば継

続して参加したいという声もあった。しかし実際に授業で行なうとなった場合の問題点の指摘もあった。一つは、iPadなどの機材の調達は公立の小学校では難しいことである。参加した教員が在籍している小学校では、タブレットは授業で使われていなかった。もう一つは、機材や材料の設置と保管である。授業ではその時間内で準備から撤収までを行なうので、制作のための時間が短くなり、日常の時間割内で行なう授業に組み込むのは難しいという意見や教室内での機材保管に場所を取るとの意見が多く、撮影機材のさらなるコンパクト化、素材作りのスペースと撮影スペースの配分などの改良点が多く見つかった。子供各自の机のスペースだけで制作ができ、設置や片付けが簡単にできるコンパクトなアニメ撮影セットの考案という今後の展開も考えられる。これは、次年度以降の課題としたい。



写真1 小冊子「映像教育普及研究」vol.1

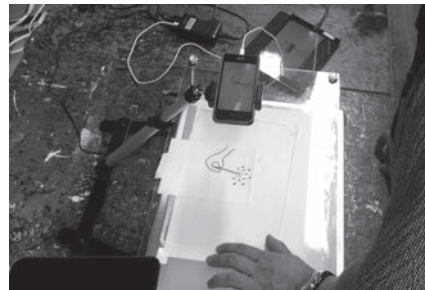


写真2 小学校教員対象のワークショップで使用した機材

所員の主な活動一覧

浅沼由紀

◆建築・インテリア学科 教授 建築デザイン研究室

◆建築計画、住環境計画、高齢者、地域居住、コミュニティ形成

著書

●長澤泰監修、水村容子・浅沼由紀・井上剛伸・定行まり子・橋本彼路子・吉川和徳『初めて学ぶ 福祉住環境（第三版）』市ヶ谷出版社、2018年10月

研究発表

●長山洋子・浅沼由紀・井上揺子・星野茂樹・白井信・山崎裕子「高齢期女性の居場所における収納システムの提案とその評価2—文化式システム収納家具の使用実験」、「文化学園大学第51回学内研究発表会 造形学部の部 要旨集」、pp.5-8、2017年9月

荒井知恵

◆デザイン・造形学科 准教授 メディア・映像研究室

◆アニメーション表現、映像表現、アニメーション教育

作品展示

- 風展、ブックギャラリー ポポタム（目白）、2017年10月
- Book +、MOTOYA Book Cafe Gallery（初台）、2017年6月、2018年6月
- 第33回文化学園大学・文化学園短期大学部教員研究作品展、2018年6月
- ばらばらマンガ喫茶展 ファミリー、Space K（代官山）、2018年9月
- カレンダー展、Coffee & Gallery ぬいじう（曙橋）、2017年12月、2018年12月

作品上映

- 福井映画祭2017、鯖江市文化センター（鯖江）、2017年2月
- Tricky Women 2017、Metro Kinokulturhaus（オーストリア）、2017年3月
- SKIPシティ国際Dシネマ映画祭、SKPシティ（埼玉県川口市）、2017年7月
- Into Animation7、新国立美術館（六本木）、2017年8月
- 第3回東京神田神保町映画祭、東京古書会館（神保町）、2017年11月
- すかがわ国際短編映画祭、福島県須賀川市文化センター、2018年5月
- 栃木蔵の街映画祭2018、栃木高校講堂他（栃木市）、2018年5月
- 福岡インディペンデント映画祭2018、福岡市科学館、2018年9月
- はままつ映画祭2018、木下恵介記念館（静岡県浜松市）、2018年11月
- 東京ドキュメンタリー映画祭2018、K's Cinema（新宿）、2018年11月

研究発表

- 「手描きアニメーション—個人制作のワークフロー」、教員研究発表会2018

岩塚一恵

◆建築・インテリア学科 准教授 建築デザイン研究室

◆アート・プロジェクト、実験芸術、まちづくり

作品展示

- 紀の国トレイナート2017、JRきのくに線・紀州鉄道沿線地域（和歌山）、2017年10月
- drifting memories β、house84（名古屋）

- 紀の国トレイナート2018、JRきのくに線・紀州鉄道沿線地域（和歌山）、2018年8月-9月

ワークショップ

- 「御坊紀州鉄道ダイブ」、紀伊国トレイナート2018

作品掲載

- 「紀の国トレイナート2018 アートが駅舎彩る」紀伊民報、2018年7月31日号
- 「御坊市でアートイベント」和歌山テレビ ニュースWTV、2018年8月
- 「西御坊駅とアート融合」日高新報、2018年8月18日号
- 「アーティスト駅長に戴帽」日高新報、2018年8月19日号
- 「トレイナート 御坊でローカルダイブ」日高新報ONLINE、2018年8月
- 「紀州鉄道がトレイナート初参加」日高新報ONLINE、2018年8月
- 年鑑日本の空間デザイン刊行委員会編集『年鑑日本の空間デザイン2019』六耀社、2018年12月

受賞

- 紀の国トレイナート2017 入選
- IAG AWARDS 2017 準入選
- 紀の国トレイナート2018 入選
- DSA日本空間デザインアワード2018 BEST50賞、日本空間デザイン協会
- 中之条ビエンナーレ国際現代芸術祭2019 入選

大関 徹

◆デザイン・造形学科 教授 造形・色彩学研究室

◆色彩学、カラーデザイン、色彩調和、色彩文化、ファッションカラー

著書（共著）

- 「カラーコーディネーター検定試験 スタンダードクラス公式テキスト」東京商工会議所、2020年1月
- 「カラーコーディネーター検定試験 アドバンスクラス公式テキスト」東京商工会議所、2020年1月

制作

- 「INTERCOLOR 2020 Spring-Summer JAFCA Color Proposal」日本流行色協会
- 「INTERCOLOR 2020 Autumn-Winter JAFCA Color Proposal」日本流行色協会

研究発表

- 日本市場色彩動向および将来予測動向について発表、INTERCOLOR CONFERENCE フランス・マルセイユ大会（2018年6月）、ポルトガル・ポルト大会（2018年11月）

研究活動

- 日本市場色彩動向に関する統計、トレンド研究（継続研究）
- 色彩文化研究（継続研究）

岡部タカノブ

◆デザイン・造形学科 准教授 メディア・映像研究室

◆デジタルイラストレーション、3D、CG、メディア

作品展示

- 第33回文化学園大学・文化学園短期大学部教員研究作品展、「Waterfall 2018」（アクリル板にインクジェットUVプリント）、2018年6

月

- アジアグラフィック2018東京展、「Waterfall 2018」、2018年11月
- アジアグラフィック台湾展、「Waterfall 2018」、2018年11月
- 第34回文化学園大学・文化学園短期大学部教員研究作品展、「化石の街 2019」(アクリル板にインクジェットUVプリント)、2019年6月
- アジアグラフィック2019東京展、「化石の街 2019」、2019年11月

岡本 泰子

- ◆デザイン・造形学科 准教授 染織研究室
- ◆織物、繊維造形PC刺繍ミシンによる立体造形、サイエンティフィック・イラストレーション、動物デッサン

作品展示

- 第32回文化学園大学・文化学園短期大学部教員研究作品展、2017年6月
- 第81回新制作展、「Spine 2017-1」、国立新美術館、2017年9月-10月
- 縫・染織開設50周年記念展、「Spine 2017-2」、東京藝術大学 陳列館、2017年11月
- テキスタイルアート・ミニアチュール展5 - 百花百躍 -、「Spine 2017-1」、Gallery 5610(東京)・祥明大学校ギャラリー(韓国)・福岡アジア美術館ギャラリー(福岡)、2017年11月-2018年4月
- 第33回文化学園大学・文化学園短期大学部教員研究作品展、2017年6月
- 第82回新制作展、「Spine 2018-1」、国立新美術館、2018年9月-10月

著作・報告書

- 絶滅哺乳類の紹介復元画、「毎日小学生新聞」2017年4月～10月、毎月2回～3回、合計16回
- 東京国際ミネラル協会「新宿ミネラルショー」ガイドブック及び会場パネル(図11、恐竜の分類)、2017年6月
- 『動物デッサンテクニック』誠文堂新光社、2018年6月

ワークショップ

- 藍の生葉染体験、北区立西ヶ原東保育園、2017年8月・2018年8月

押山 元子

- ◆デザイン・造形学科 教授 金工研究室
- ◆工芸、金工、ジュエリー

作品展示

- 第44回山梨美術協会会員展 審査委員、山梨県立美術館、2017年2月
- Asia Week New York 2017、Onishi Gallery、2017年3月
- 第32回文化学園大学・文化学園短期大学部教員研究作品展、2017年4月
- 第57回東日本伝統工芸展、日本橋三越本店他、2017年4月、5月
- 第56回日本伝統工芸富山展、高岡市美術館、2017年5月
- 五月の風展、日本橋高島屋、2017年5月
- 第46回伝統工芸日本金工展、明治神宮、2017年6月
- 第9回B-METAL展、南青山サロンドフルール、2017年7月
- 第80回山梨美術協会 審査委員、山梨県立美術館、2017年7月
- 第64回日本伝統工芸展、日本橋三越本店他、2017年9月-2018年3月

月

- 第45回山梨美術協会会員展 審査委員、山梨県立美術館、2018年2月
- Asia Week New York 2018、Onishi Gallery、2018年3月
- 第33回文化学園大学・文化学園短期大学部教員研究作品展、2018年6月
- 第58回東日本伝統工芸展、日本橋三越本店他、2018年4月、5月
- 五月の風展、日本橋高島屋、2018年5月
- 第57回日本伝統工芸富山展、高岡市美術館、2018年5月
- 第47回伝統工芸日本金工展、石洞美術館、2018年6月
- 第81回山梨美術協会 審査委員、山梨県立美術館、2018年7月
- 第10回B-METAL展、南青山サロンドフルール、2018年10月
- 第65回日本伝統工芸展、日本橋三越本店他、2018年9月-2019年3月

研究発表

- 「3D CAD、3D Printerを活用したデザイン考察モデルの研究 教育改革支援助成金事業報告(共同研究)」、『文化学園大学第52回学内研究発表会 造形学部の部 要旨集』、2018年9月

角谷 彩子

- ◆デザイン・造形学科 助教 染織研究室(捺染室)
- ◆ファッションデザイン、染織、民俗芸能衣装

論文

- 「民俗芸能衣装の製作に関する調査・研究—「番楽」翁衣装の事例」、『文化学園大学紀要服装学・造形学研究』49、pp.17-27、2018年1月
- 「民俗芸能衣装の再現制作—「根子番楽」翁舞の襦袢」、『服飾文化学会誌(作品編)』10(1)、pp.39-44、2018年3月
- 「民俗芸能「番楽」翁衣装の材料と技法に関する調査・研究」、『服飾学研究』1(1)、pp.1-13、2019年3月

研究発表

- 「民俗芸能衣装の再現制作—「根子番楽」翁舞の襦袢」、『第18回服飾文化学会大会要旨集』2017年5月
- 「民俗芸能衣装の調査・研究—「番楽」翁衣装の事例」、『文化学園大学第51回学内研究発表会、造形学部の部要旨集』2017年9月
- 「「番楽」翁衣装の製作に関する調査研究」、『第19回服飾文化学会大会要旨集』2018年5月
- 「民俗芸能衣装の染料分析に関する調査研究—「杉沢比山」翁衣装の事例」、『文化学園大学第52回学内研究発表会 造形学部の部 要旨集』2018年9月

作品展示

- 第32回文化学園大学・文化学園短期大学部教員研究作品展、2017年6月
- 「IHNN」2017AW(テキスタイルデザイン提供)、2017年6月

嘉松 聡

- ◆デザイン・造形学科 准教授 絵画研究室
- ◆絵画表現、技法、材料、動植物図譜

作品発表

- 花の宴展、木ノ葉画廊(京橋)、2017年4月
- サマーコレクション展、ギャラリーNEW新九郎(小田原)、2017年6月

- 第32回文化学園大学・文化学園短期大学部教員研究作品展、2017年6月
- 嘉松聡展、ギャラリーセイコウドウ（銀座）、2017年8月
- 第8回 Giovanni展、ギャラリーセイコウドウ（銀座）、2017年10月
- 時のかたち小品展、ギャラリーセイコウドウ（銀座）、2017年11月
- 画廊楽IIリニューアルオープン記念特別企画「ReBORN」展、2018年1月
- 第33回 文化学園大学・文化学園短期大学部教員研究作品展、2018年6月
- 第24回時のかたち展、横浜赤レンガ倉庫（横浜）、2018年7月
- 嘉松聡展、ギャラリーセイコウドウ（銀座）、2018年8月
- 第9回 Giovanni展、ギャラリーセイコウドウ（銀座）、2018年9月
- 時のかたち小品展、ギャラリーセイコウドウ（銀座）、2018年10月

研究発表

- 嘉松聡・七里真代・近藤静香「学外活動例『ワークショップ』を活用した試み 平成29年度・平成30年度」、文化学園大学第52回学内研究発表会 造形学部の部、2018年9月

ワークショップ

- 麻布十番商店街・元麻布ギャラリーにて地域密着型ワークショップ、2017年8月、2018年8月

加茂幸子

◆デザイン・造形学科 准教授 基礎造形研究室

◆彫刻、テラコッタ、陶

作品展示

- 第32回文化学園大学・文化学園短期大学部教員研究作品展、2017年6月
- ～モリノオト～展（加茂幸子×齋藤ナオ、二人展）、風花画廊（福島）、2017年6月
- Fantastic Sculptures～女流作家による～、日本橋三越本店アートスクエア（日本橋）、2017年8月
- 猫をめぐるものがたり展、風花画廊（福島）、2017年10月
- つまり猫は、最高傑作である。展、ギャラリーアートもりもと（銀座）、2017年11月
- ～現代作家70名が描く、つくる～吾輩の猫展、佐藤美術館（信濃町）、2017年11月
- 第33回文化学園大学・文化学園短期大学部教員研究作品展、2018年6月
- 加茂幸子彫刻展～陶彫とテラコッタ～、阿部敬四郎ギャラリー（仙台）、2018年9月
- 加茂幸子彫刻展～柔らかな陶～、美術工芸サロン・日本橋高島屋、2019年2月

北岡竜行

◆デザイン・造形学科 准教授 絵画研究室

◆絵画、現代美術、胤、プロジェクトマッピング

作品展示

- 第32・33回文化学園大学・文化学園短期大学部教員研究作品展、2017年、2018年

研究発表

- 「須坂古民家再生プロジェクト活動報告」（共同研究）、文化学園大学第51回・52回学内研究発表会、2017年9月、2018年9月

ワークショップ、プロジェクト

- 「須坂古民家再生プロジェクト」（共同研究）、長野県須坂市、2017年、2018年

佐藤百合子

◆デザイン・造形学科 教授 染織研究室

◆型絵染、テキスタイル、染織工芸、着物

作品発表など

- 第32回文化学園大学・文化学園短期大学部教員研究作品展、2017年6月
- 第72回新匠工芸会展、東京都美術館・京都市美術館、2017年10月
- 「染の小道」10周年記念着物ショー（着物2点出品）、2018年2月
- 第33回文化学園大学・文化学園短期大学部教員研究作品展、2018年6月
- 韓国衣類産業学会（SFTI）国際ファッション招待展（ポルトガル）、2018年7月
- 第73回新匠工芸会展、東京都美術館・京都市美術館、2018年10月
- 代官山ネオシニア主催「WAパーティー！」（着物3点出品及びショー監修）、代官山ヒルサイドテラス、2018年10月
- 新匠工芸会春季展（着物1点帯2点）、京都市立芸術会館、2019年3月

講演・研究発表

- 「長野県古民家再生プロジェクト活動報告」（共同研究）、文化学園大学第51回・52回学内研究発表会、2017年9月、2018年9月
- 「型絵染の魅力と制作の実際」、平成29年度文化学園大学特別公開講座、2018年3月
- 「『型絵染』の魅力と 伝統にとどまらない可能性」、第2回ファッションビジネス学会デジタルテキスタイル研究部会講演会、2018年8月

澤田志功

◆デザイン・造形学科 教授

◆立体造形、木彫による具象表現

作品発表

- 澤田志功展「Chain Reaction」、ギャラリーアートもりもと（銀座）、2017年3月
- 第32回文化学園大学・文化学園短期大学部教員研究作品展、2017年6月
- つまり猫は、最高傑作である。展、ギャラリーアートもりもと（銀座）、2017年11月
- グループ展「Year-End Exhibition of Mini sculptures」、ギャラリーせいほう（銀座）、2017年12月
- 第33回文化学園大学・文化学園短期大学部教員研究作品展、2018年6月
- グループ展「ゴシックホワイト～白の閃影～」、高島屋日本橋店美術画廊及び巡回で大阪展、2018年7月
- グループ展「Year-End Exhibition of Mini sculptures」、ギャラリーせいほう（銀座）、2018年12月

- 第103回二科展出品（彫刻の森美術館奨励賞受賞）、国立新美術館（六本木）、2018年9月
- グループ展「木彫フォークアートおおやの世界展」、阪急うめだギャラリー（大阪）、2018年11月

七里真代

◆デザイン・造形学科 准教授 造形・色彩学研究室

◆基礎デザイン・基礎造形

作品発表

- 第32回文化学園大学・文化学園短期大学部教員研究作品展、2017年6月
- 第6回 FEI PRINT AWARD展、FEI ART MUSEUM YOKOHAMA（横浜）、2017年9月
- 第7回山本鼎版画大賞展、上田市立美術館（長野）2018年2月-3月
- 第17回南島原市セミナリヨ現代版画展、長崎県立美術館 他（長崎）、2018年2月-4月
- 第33回文化学園大学・文化学園短期大学部教員研究作品展、2018年6月
- 第11回大野城まどかびあ版画ビエンナーレ、大野城まどかびあ（福岡）、2018年9月

研究発表

- 嘉松聡・七里真代・近藤静香「学外活動例『ワークショップ』を活用した試み 平成29年度・平成30年度」、文化学園大学第52回学内研究発表会造形学部の部、2018年9月

ワークショップ

- 麻布十番商店街・元麻布ギャラリーにて地域密着型ワークショップ、2017年8月・2018年8月

柴田真美

◆デザイン・造形学科 教授 造形・色彩学研究室

◆日本画、臨床美術、美術解剖学

研究報告

- 「第3回日本トルコ友好作品展「日本とトルコが古民家で出会ったら」—ファッション教育をめざしたグローバルな技術および表現の探求」、文化・住環境学研究所報『しつらい』Vol.7、pp.18-19、2018年3月
- 「『日本画と臨床美術を融合した創作実践—心理学的質的分析と構造化による開発』のための予備調査（研究ノート）」、「文化学園大学・文化学園短期大学部紀要」第50集、pp.49-58、2019年1月

作品発表（日本画）

- 第43回春季創画展、「萱の中にて」（S30号）、T-ART GALLERY・TERADATORIA、2017年4月
- 第32回文化学園大学・文化学園短期大学部教員研究作品展、「じゃれ遊び」（P10号）、2017年6月
- 第31回夢・色・形展、「アニマル ドリーム」（F20号）、山梨県立美術館、2017年8月
- 第44回創画展、「エクスの旅」（S100号）、東京都美術館、2017年10月
- 第2回Will+s展、「ガーデン〜モノケの来訪」（S30号）、池袋西武アートフォーラム、2019年11月-12月

- 若手作家による日本画・洋画展、まるひろ川越店、2017年4月-5月
 - 猫の絵展、伊勢丹府中店、2018年2月-3月
 - 第44回春季創画展、「スカルの生成」（S30号）、池袋西武 西武ギャラリー、2018年4月
 - 第7回プラチナアート協会会員展、「チビ丸」（F3号）他、聖路加病院ギャラリー、2018年4月
 - 第33回文化学園大学・文化学園短期大学部教員研究作品展、「アニマル ドリーム」（F20号）、2018年6月
 - 第22回創画会東京研究会 夏の会、「エクス ロッキー」（屏風）他、銀座 ギャラリー青蘿、2018年8月
 - 第27回臥龍桜日本画大賞展、「生まれ そして死にゆく」（S50号）、高山市民文化会館、2018年11月-12月
 - 第44回創画展、「トロイの木馬はかくありきか」（S100号）、東京都美術館、2018年10月
 - 第5回花とみどり・いのちと心展、「メタモルフォーゼス」（日本画インスタレーション）、国営昭和記念公園花みどり文化センター、2018年11月-12月
 - 第8回プラチナアート展、ヤマダ電機高崎アートギャラリー、2019年2月
- #### ワークショップ
- 「描いて貼ってマイトバッグを作ろう」、女子美術大学同窓会100周年記念山梨支部ワークショップ、甲府 防災会館オープンスクエア、2017年7月
 - 「脳が喜ぶ・心が笑う〜色鉛筆や墨でカードを描こう」、国営昭和記念公園花みどり文化センター、2018年12月

白井 信

◆デザイン・造形学科 教授 グラフィック・プロダクト研究室

◆グラフィックデザイン、アート・プロジェクト

ワークショップ

- 国立生医医療研究センター（もみじの家）にて、在宅医療ケア児と家族支援のためのワークショップ、2017年3月

アート・プロジェクト

- 国立生医医療研究センターの空中庭園の遊具リニューアルプロジェクト、2017年8月

作品発表

- 第32回文化学園大学・文化学園短期大学部教員研究作品展、2017年6月
- 第33回文化学園大学・文化学園短期大学部教員研究作品展、2018年6月

研究発表（共同発表）

- 「長野県原村との地域連携振興プロジェクト、ネチャーハンティング in 信州—ハケ岳の自然を活かした地域発信のデザイン」、文化学園大学第51回学内研究発表会 服装学部の部、2017年9月

曾根里子

◆建築・インテリア学科 准教授 インテリアデザイン研究室

◆建築計画、住居計画、住居学、コミュニティ

研究活動

- 「大規模集合住宅における共用施設の活用状況に関する研究—共用空間・コミュニティ活動の実態に関する考察」2017年
- 「時間的視点による住まいの変容と影響要因からみた住宅計画学的研究—

住みつく・住みこなす・住み繋ぐ・住まいを再生する視点から—」2017年

●曾根里子・江川香奈「大規模マンションにおける共用空間の利用とコミュニティ活動の経年的変化に関する研究」(平成30年度文化・住環境学研究共同研究)、2018年4月-2019年3月

高橋正樹

◆建築・インテリア学科 教授 インテリアデザイン研究室

◆環境心理、環境行動、環境行動デザイン

研究発表

- 陳妍彤・高橋正樹「子どもの外遊び場に関する研究」、『日本インテリア学会大会梗概集』、pp.43-44、2017年10月
- 李明燁・高橋正樹「住宅平面図における動線の数量化からみた間取りの特徴に関する研究」、『日本インテリア学会大会梗概集』、pp.15-16、2017年10月
- 渡辺裕子・高橋正樹・井上瑠子「長野県須坂市の古民家を利用した実践型「ものづくり教育」その3」、『日本インテリア学会大会梗概集』、pp.47-48、2017年10月
- 高橋正樹「住宅内に身体活動量と座位行動の実態」、『日本インテリア学会大会梗概集』、pp.93-94、2017年10月
- 高橋正樹「序言 環境デザインと健康」、『人間・環境学会 MERA ジャーナル』、p.1、2018年3月
- 高橋正樹「住宅内における活動量の評価について」、『第64回建築人間工学小委員会研究会「身体活動量による住宅評価」』、pp.29-47、2018年3月
- 陳妍彤・高橋正樹「子どもの外遊び行動の実態と意識に関するアンケート調査」、『日本インテリア学会大会梗概集』、pp.65-66、2018年10月
- 徳田良英・高橋正樹他「身体活動量計測方法の比較検討」、『東京理理学療法士協会区西北部ブロック部学術集会、G-05、2019年2月
- 高橋正樹・渡辺秀俊他「執務空間における立位を促す視覚的効果に関する研究」、『日本建築学会大会梗概集』E冊、No.5099、pp.219-220、2018年8月
- 高橋正樹「第2期：執務空間において立位作業を促す視覚的効果の研究(平成29年10月1日～平成30年9月30日)」(株式会社オカムラとの共同研究)、pp.1-94、2019年3月

研究活動

- 国土交通省国土技術政策総合研究所 ライフステージに即したバリアフリー効果の見える化手法の確立委員会委員、2018年(継続)
- インテリア産業協会 各種委員会委員、2015-2018年(継続)
- 日本建築学会環境工学本委員会環境心理生理運営委員会環境心理小委員会委員、2002-2018年(継続)

種田元晴

◆建築・インテリア学科 助教 建築デザイン研究室

◆昭和建築史、建築意匠、立原道造研究、図学

論文

- 石井翔大・種田元晴・安藤直見「大江宏設計『法政大学市ヶ谷キャンパス計画』の設計過程」、『日本建築学会計画系論文集』738号、pp.2131-2141、2017年8月(査読付)
- 石井翔大・種田元晴・安藤直見「『混在併存』を基軸とする大江宏の建築

観の変遷」、『日本建築学会計画系論文集』746号、pp.783-793、2018年4月(査読付)

著書

●陣内秀信監修・法政大学建築学科卒業生101人著『「建築」という生き方』南風舎、2018年1月(編著)

研究発表

- 種田元晴「大江宏『追分の山荘』にみる立原道造『浅間山麓に位する芸術家コロニーの建築群』の影響」、『2017年度日本建築学会大会学術講演梗概集 建築歴史・意匠』、pp.761-762、2017年8月
- 種田元晴・石井翔大「建築家・大江宏による『オーナー博士像覆堂』の形態構成について」、『2017年度日本図学会秋季大会学術講演論文集』、pp.43-48、2017年12月
- Naomi ANDO, Motoharu TANEDA, Shota ISHII and Nobuhiro YAMAHATA, "Composition and Deconstruction of Spaces Depicted in Shinji SOMAI's Films", *Proceedings of The 15th International Conference on Geometry and Graphics*, pp.112-112、2018.8(査読付)
- 種田元晴・石井翔大「大江宏『大串邸』にみる立原道造『ヒアシンスハウス』の影響—大江宏の住宅作品に関する研究」、『2018年度日本建築学会大会学術講演梗概集 建築歴史・意匠』 pp.213-214、2018年9月
- 種田元晴「立原道造『或る果実店』設計案の図面表現について」、『2018年度日本図学会秋季大会学術講演論文集』、pp.1-6、2018年12月

作品展示

- 第20回法匠展、「桂と日光と外国人建築家」(似顔絵)、エコギャラリー新宿、2017年9月
- ハモニカ横丁にあつまる建築家展、「個室は大吟醸の夢をみる」(建築設計案)、ギャラリー間、2018年6月
- 第21法匠展、「壮年アクションスターの無謀な挑戦に人類の進化と娯楽映画の限界を感じる」(似顔絵)、エコギャラリー新宿、2018年9月

記事

- 「新刊紹介 | 立原道造の夢みた建築」、『図学研究』153号、日本図学会、p.32、2017年6月
- 横山ゆりか・椎名久美子・種田元晴「日本図学会年表(1965～2016)」、『図学研究』第51巻(記念号)、日本図学会、pp.172-192、2017年7月
- 「アーキテクトーク | 80年前の透視図が導くこれからの建築」、JARA 広報誌『PERSPECTIVE 2017』、日本アーキテクチュラル・レンダラーズ協会、pp.39-4、2017年9月
- 「透視図に込められた建築観の探求」、『図学研究』154号、日本図学会、pp.26-27、2017年9月
- 「ヒアシンスハウスを抜ける風」、『風の詩』第10号、ヒアシンスハウスの会、pp.4-5、2017年10月
- 「審査評 | 卒、17 SOTSUTEN 全国合同建築卒業設計展」、『卒、17』図録、総合資格、2017年11月
- 「活動レポート | BIMの日2018シンポジウム」、『建築雑誌』1711号、日本建築学会、pp.70-71、2018年5月
- 種田元晴・市川紘司・青井哲人・橋本純・辻泰岳・佐藤美弥・小川格「佐々木宏氏インタビュー [1931-]『真相』の戦後日本建築」、建築討論ウェブサイト、日本建築学会、2018年5月
- 「立原道造がみた夢の続き—追分の芸術家コロニー」、『追分流』Vol.2、信濃追分文化磁場油や、pp.4-7、2018年7月

- 竹之内和樹・西井美佐子・種田元晴・望月達也「図学教育研究会 デジタルモデリング研究会共催 CADの変遷と利用の現状および3Dソフトウェアでのモデリングの実際」、『図学研究』158号、日本図学会、pp.42-45、2018年9月
- 「浅間山麓に、立原道造の夢を訪ねる」、『黒の会手帖』第4号、黒の会、p.11、2018年12月
- 「建築CAD利用史の構築をめざして」、『「BIMの日2019シンポジウム」BIMによってなくなるもの・うまれるもの』資料集』、日本建築学会、pp.1-61-64、2019年2月
- 「建築3000」、『黒の会手帖』第5号、黒の会、pp.14-16、2019年3月受賞
- 日本建築学会奨励賞：「無題 [浅間山麓の小学校] 鳥瞰図」の構図について—立原道造の田園的建築観に関する研究、2017年4月
- 日本図学会優秀研究発表賞：建築家・大江宏による『オーナー博士像禮堂』の形態構成について、2018年5月

講演

- 日本図学会主催「2017年度日本図学会50周年記念大会（東京）| パネル講演：私にとっての図学」、パネリスト、東京大学駒場キャンパス、2017年8月6日
- 日本建築学会情報システム技術委員会設計・生産の情報化小委員会主催「BIMの日 2018 シンポジウム | BIMはどこを目指すべきか—他産業に学ぶ」、まとめ、建築会館、2018年2月20日
- 立原道造の会主催「風信子忌」内ミニ講演「『立原道造の夢みた建築』について」、講演、ホテルシャウッド8階ロビンスクラブ、2018年3月31日
- 日本図学会図学教育研究会・デジタルモデリング研究会共催「CADの変遷と利用の現状および3Dソフトウェアでのモデリングの実際」話題提供、講演、中部大学名古屋キャンパス 三浦記念会館、2018年5月13日
- 大江宏賞運営委員会主催「大江宏賞受賞メダル授与式」内ミニ講演「大江宏に学ぶもの—かたちに潜むミステリー」、講演、法政大学ポアソナードタワー、2018年6月9日
- 特定非営利活動法人油やプロジェクト主催「浅間山麓談義」基調講演「立原道造の“芸術家コロニー”と私たち」、講演、信濃追分文化磁場油や、2018年10月27日
- 四季派学会平成30年度冬季大会講演「立原道造の描いた建築、交わされなかった手紙、継がれた夢」、講演、法政大学、2018年11月24日
- 日本建築学会情報システム技術委員会設計・生産の情報化小委員会主催「BIMの日2019シンポジウム | BIMによってなくなるもの・うまれるもの」第一部、建築情報学技術研究WG活動報告、建築会館、2019年2月19日

審査員

- 大江宏賞運営委員会主催「第14回 大江宏賞公開講評審査会」、審査員、法政大学市ヶ谷田町キャンパス、2018年3月17日
- 全国合同卒業設計展「卒、19」、審査員、墨田公園リバーサイドギャラリー、2019年2月23日
- 大江宏賞運営委員会主催「第15回 大江宏賞公開講評審査会」、審査員、法政大学市ヶ谷田町キャンパス、2019年3月16日

鳥海 薫

- ◆デザイン・造形学科 准教授 造形・色彩学研究室
- ◆色彩学、色彩調和、色彩文化、流行色、水彩イラストレーション

作品発表

- 第32回文化学園大学・文化学園短期大学部教員研究作品展、「Scent of Grass」、2017年6月
 - 第33回文化学園大学・文化学園短期大学部教員研究作品展、「Deep sea」、2018年6月
- ワークショップ
- 麻布十番商店街・元麻布ギャラリーにて地域密着型ワークショップ、2018年7月
- 研究発表
- 「色彩調和について—配色の教科書の紹介」、「学外活動例『ワークショップ』を活用した試み（共同研究）」、文化学園大学第52回学内研究発表会造形学部の部、2018年9月
- 書籍
- 城一夫監修・色彩文化研究会（分担執筆）『配色の教科書—歴史上の学者・アーティストに学ぶ美しい配色のしくみ』パイインターナショナル、pp.248-257、286-293、2018年9月

成井美穂

- ◆デザイン・造形学科 准教授 金工研究室
- ◆金属工芸、鍛金、彫金、文化財

作品発表

- 第32回文化学園大学・文化学園短期大学部教員研究作品展、2017年
 - 第33回文化学園大学・文化学園短期大学部教員研究作品展、2018年
- 論文（査読付）
- 成井美穂 他2名「古代の接合技術・粒金の金属学的解析と復元」、『銅と銅合金』第56巻1号、pp.5-9、2017年

学会発表（査読付）

- 成井美穂 他7名「平山郁夫シルクロード美術館所蔵 粒金作品の科学的分析」、『日本金属学会秋期講演大会概要集』、p.375、2018年

研究発表

- 教育改革支援助成金事業報告（共同研究）「3D CAD、3D Printerを活用したデザイン考察モデルの研究」、『平成30年度文化学園大学第52回学内研究発表会造形学部の部要旨集』、2018年

春田幸彦

- ◆デザイン・造形学科 准教授 金工研究室
- ◆七宝、彫金、美術工芸、ジュエリー、オブジェ

作品発表

- 第50回日本七宝作家協会国際展、東京都美術館、2017年10月
- 第51回日本七宝作家協会展、東京都美術館、2018年10月
- 驚異の超絶技巧!展、三井記念美術館・岐阜県現代陶芸美術館・山口市立美術館・富山県水墨美術館、2017年9月-2018年4月
- 超絶展、ヒコ・みづのジュエリーカレッジHOLE in the WALL、2017年9月
- 日本七宝作家協会名古屋展、名古屋市民ギャラリー、2017年11月
- 改組新第4回日展、国立新美術館、2017年11月
- 中国景泰藍・日本七宝作家合同展、上海高島屋、2017年12月
- ART EXHIBITION、韓国ソウルCOEX、2018年1月
- 香港ハーバー・アート・フェス、2018年5月
- 七宝のアートジュエリー展、銀座ACギャラリー、2018年9月

●ロスト・オブ・アルケミスト展、銀座ギャラリー・ブス、2018年10月

講演・企画

- 「アーティスト・トークセッション」(講演会) 前原冬樹・春田幸彦・橋下雅也、三井記念美術館レクチャールーム、2017年10月
- 「宝石とエマイユ(七宝)を組み合わせたジュエリーの魅力」(企画)、講師 中嶋邦夫先生、東京都美術館、2017年10月
- 「作品紹介と制作について」(企画)、講師 沢田均先生、東京都美術館、2017年10月
- 「七宝の伝統から現代へ」(講演会)、日本煎茶道の会、2018年6月
- 「有線七宝による現代アート表現」(特別講義)、武蔵野美術大学、2018年9月
- 「有線七宝による現代アート表現」(特別講義)、多摩美術大学、2018年10月
- 「有線七宝による現代アート表現」(特別講義) 講評会、金沢卯辰山工芸工房、2017・2018年9月
- 「有線七宝による現代アート表現」(講演会・作品展示)、茅ヶ崎市教育委員会・茅ヶ崎美術館・茅ヶ崎図書館、2018年9月

メディア

- テレビ東京「美の巨人たち・並河靖之の七宝」(出演)、「桜蝶図平皿」一部再現制作、2018年8月
- ロッセ広報誌「Shall we Lotte」(作品、インタビュー掲載)、2018年秋号
- 月刊「アートコレクターズ」(作品掲載)、2018年7月・11月

研究発表

- 「伝統技法有線七宝による現代表現—平面用釉薬を使用した立体表現の可能性」、『文化学園大学第51回学内研究発表会 造形学部の部 要旨集』、2017年9月
- 教育改革支援助成金事業報告(共同研究)「3D CAD、3D Printerを活用したデザイン考察モデルの研究」、『文化学園大学第52回学内研究発表会 造形学部の部 要旨集』、2018年9月

久木章江

◆建築・インテリア学科 教授 建築デザイン研究室

◆建築構造、構造安全、地震防災、環境振動

審査論文

- 平間ちひろ・石川孝重・久木章江・グエンミンハイ「頭付きスタッドを用いた押抜き試験のせん断耐力に関する文献研究」、『日本建築学会構造系論文集』82巻735号、pp.745-751、2017年5月
- Chihiro Hirama, Takashige Ishikawa, Akie Hisagi, "Shear strength of headed stud push-out tests: Comprehensive literature review focusing on slab type, failure mode, and large-diameter headed stud", *Eurosteel 2017*, September 2017

著書(共著)

- 「建築物の振動に関する居住性能評価規準・同解説」、『日本建築学会環境基準』、2018年11月

学会発表

- 平間ちひろ・石川孝重・久木章江「非定常的な水平振動に対する感覚評価手法の検討—ランダム振動に対する振動感覚の評価に向けて その31—」、『日本建築学会大会学術講演梗概集(環境工学)』pp.427-428、2017年7月

- 石川孝重・久木章江・平間ちひろ「非定常的な水平振動の感覚評価手法にもとづく設計試算—ランダム振動に対する振動感覚の評価に向けて その32—」、『日本建築学会大会学術講演梗概集(環境工学)』pp.429-430、2017年7月

- 久木章江・石川孝重・西地文香「水平振動下における各作業の特徴—環境振動に対する作業難度に関する実験的研究 その2—」、『日本建築学会大会学術講演梗概集(環境工学)』pp.433-431、2017年7月

- 梅原睦実・久木章江「災害後に避難所から応急仮設住宅に変化する公共施設—非日常時の機能を主体とした設計の提案—」、『日本建築学会学術講演梗概集(建築デザイン)』pp.260-261、2017年7月

- 久木章江・石川孝重・平間ちひろ「非定常的な水平振動に対する感覚に基づく居住性能評価に関する研究—その1 実験概要および1/3オクターブバンド分析による評価—」、『日本建築学会関東支部研究報告集』88巻、pp.405-408、2018年3月

- 平間ちひろ・石川孝重・久木章江「非定常的な水平振動に対する感覚に基づく居住性能評価に関する研究—その2 振動数特性を補正するフィルターを用いる評価手法の提案—」、『日本建築学会関東支部研究報告集』88巻、pp.409-412、2018年3月

- 久木章江・石川孝重・平間ちひろ「非定常的な水平振動に対する感覚に基づく居住性能評価に関する研究—その3 提案手法による設計への適用—」、『日本建築学会関東支部研究報告集』88巻、pp.413-416、2018年3月

- 久木章江「大地震の自宅滞在型避難生活に関する研究 その4 被害想定に着目した戸建住宅居住者と集合住宅居住者の意識比較」、『日本建築学会大会学術講演梗概集(都市計画)』pp.1001-1002、2018年7月

昼間行雄

◆デザイン・造形学科 教授 メディア・映像研究室

◆映像技術、アニメーション、教育普及活動

- 作品ノート「短編映画 制作の実際」、『文化学園大学紀要』第49集、2018年3月

- 「美術教育普及活動での映像メディアの効果的な活用方法」研究報告として、冊子『映像教育普及研究VOL.1』発行、2017年8月

映像作品

- 「逢魔が時に乙姫は囁く」(短編劇映画)、2017年4月
- 「25thキネコ国際映画祭」公式記録映像、一般社団法人キネコ・フィルム、2017年11月
- 「26thキネコ国際映画祭」公式記録映像、一般社団法人キネコ・フィルム、2018年12月
- 「金星人と消えた仏像」予告編No.1～No.3制作(短編劇映画)、2018年9月・12月・2019年3月

展覧会出品

- VIDEO PARTY 2018、「逢魔が時に乙姫は囁く」(短編劇映画)、京都 Lumen gallery、2018年8月

ワークショップ

- 「シネマわくわくワークショップ〜リュミエール映画に挑戦!」講師、川崎市アートセンター、2017年7月
- 「発見体験!アニメーション」講師、四谷アートプラザ(CCAA)、2018年8月
- 「シネマわくわくワークショップ〜リュミエール映画 vol.7」講師、川崎市アートセンター、2019年3月

深田 雅子

- ◆デザイン・造形学科 助教 メディア・映像研究室
- ◆編集デザイン、民俗芸術、民俗学

論文

- 研究助成報告「造形系の未来の働き方—卒業生へのアンケート結果を中心に」、文化住環境学研究所所報『しつらい』vol.7、2018年4月

作品展示

- 「ZINE IT×10zine」出展

藤澤 英恵

- ◆デザイン・造形学科 助教 金工研究室
- ◆ジュエリー、彫金、彫刻、鉄彫刻、木彫刻

作品発表

- 多摩美術大学彫刻学科教職員作品展2017、多摩美術大学彫刻棟ギャラリー（東京）、2017年4月
- 第9回B-METAL展、サロン・ド・フルール（東京）、2017年7月
- 10周年記念2017アルル。スペース展 みち。ギャラリーカフェ アルル（東京）、2017年8月
- 第8回シューズボックススカルプチャー展、国立台湾芸術大学（台湾）、2017年11月
- 多摩美術大学彫刻学科教職員作品展2018、多摩美術大学彫刻棟ギャラリー（東京）、2018年4月
- 第1回多摩美術大学助手展、多摩美術大学アートテーク（東京）、2018年9月
- 金沢動物園アニマルアートコラボ展 vol.9、横浜市立金沢動物園（神奈川）、2018年10月
- 第10回B-METAL展、サロン・ド・フルール（東京）、2018年10月
- 第9回シューズボックススカルプチャー展、国立台湾芸術大学（台湾）、2018年11月

牧野 昇

- ◆デザイン・造形学科 准教授 メディア・映像研究室
- ◆映像メディア研究、ポピュラーカルチャー研究、服飾関連3DCGおよびVR、MR研究、コンテンツ制作

- 高橋正樹・井上瑠子・佐藤百合子・牧野昇・渡邊裕子・伊藤丙雄「長野県須坂市における古民家再生プロジェクトに関する研究報告」、『文化学園大学第51回学内研究発表会 造形学部の部要旨集』、2018年
- 牧野昇、村上剛毅、加藤淳之介「AR・VR 技術を使用したファッションデザインのためのツール開発・作品製作」、『文化学園大学第51回学内研究発表会 造形学部の部要旨集』、2018年
- 高橋正樹・井上瑠子・佐藤百合子・牧野昇・渡邊裕子・伊藤丙雄「長野県須坂市における古民家再生プロジェクトに関する研究報告」、『文化学園大学第52回学内研究発表会 造形学部の部要旨集』、2019年
- 牧野昇、村上剛毅、加藤淳之介「3DCGを用いたファッションデザインのためのツール開発・作品製作」、『文化学園大学第52回学内研究発表会 造形学部の部要旨集』、2019年

松村由樹子

- ◆デザイン・造形学科 助教 基礎造形研究室
- ◆彫刻、立体造形、木彫、抽象彫刻

研究発表

- 加茂幸子・松村由樹子「電気窯を用いたガラスオブジェの教材研究—第52回学内研究 発表会造形学部の部」、2018年9月

作品発表

- 2017春季二科展、東京都美術館、2017年4月
- 第32回文化学園大学・文化学園短期大学部教員研究作品展、2017年6月
- 第102回二科展彫刻部、「inside」会友推挙、特選受賞、国立美術館、2017年9月
- 2018春季二科展、東京都美術館、2018年4月
- 第33回文化学園大学・文化学園短期大学部教員研究作品展、2018年6月
- 第103回二科展彫刻部、「CORE」、国立新美術館、2018年9月

作品設置

- 御殿場プレミアムアウトレット、West Zone インフォメーションセンター、East Zone インフォメーションセンター、2018年9月

丸茂みゆき

- ◆建築・デザイン学科 教授 インテリアデザイン研究室
- ◆インテリア計画、ライフスタイル、リフォーム、ディスプレイ

作品発表

- グループ展、「かけはし3」（ディスプレイ）、日本郵船氷川丸、2017年4月
- グループ展、「森のすみか1」（ディスプレイ）、日本郵船氷川丸、2017年11月
- グループ展、「かけはし4」（ディスプレイ）、日本郵船氷川丸、2018年4月
- グループ展、「森のすみか2」（ディスプレイ）、日本郵船氷川丸、2018年11月
- 第32回文化学園大学・文化学園短期大学部教員研究作品展、「光の壁2」（木製照明器具）、2017年4月
- 第33回文化学園大学・文化学園短期大学部教員研究作品展、「森のクラウンツ2」（木製壁面装飾）、2018年4月

作品提供、作画指導

- フローリスト編集部『制作意図とデザイン画からわかる フラワーリースの発想と作り方』誠文堂新光社、2017年9月
- フローリスト編集部『制作意図とデザイン画からわかる 花束・ブーケの発想と作り方』誠文堂新光社、2018年10月

執筆

- 公益財団法人住宅リフォーム・紛争処理支援センター「第34回住まいのリフォームコンクール入賞作品集」講評文、pp.19,39,49,61、2017年10月
- 公益財団法人住宅リフォーム・紛争処理支援センター「第35回住まいのリフォームコンクール入賞作品集」講評文、pp.23,39,57,67、2018年10月
- 「2つの側面」、『63人のインテリア論』日本インテリア学会、p.60、2018年4月

森田和子

◆デザイン・造形学科 助手 染織研究室

◆絞り染、テキスタイルデザイン

研究発表

●「辻が花の現代作家にみる絞り染技法—久保田一竹と小倉建亮—」、
『文化学園大学第52回学内研究発表会 造形学部の部 要旨集』pp.1-3

作品発表

- 母の日のハンカチ染め体験教室、「カーネーション」(型紙)提供、2017年5月
- 第72回新匠工芸会展、「紫陽花」(着物・入選)、2017年10月
- 染の小道2018・10周年記念企画染の街のキモノショー、「華切子」(浴衣)、2018年2月
- 第33回文化学園大学・文化学園短期大学部教員研究作品展、「静寂に染みる」(着物)、2018年6月

山崎裕子

◆デザイン・造形学科 助教 グラフィック・プロダクト研究室

◆デザイン、デジタル、高齢者デザイン、地域デザイン

- 長山洋子・浅沼由紀・井上揺子・星野茂樹・白井信・山崎裕子「高齢期女性の居場所における収納システムの提案とその評価2—文化式システム収納家具の使用実験」、『文化学園大学第50回学内研究発表会造形学部の部要旨集』、2017年
- 長野県飯山市経済部農林課「飯菜食堂プロジェクト」の看板デザインと地元野菜のイラスト制作、2018年
- 子供向けワークショップ「グラフィックデザイナー」、NPO法人夢らくぞプロジェクトお仕事なりきり道場、2019年2月

山田拓矢

◆デザイン・造形学科 准教授 グラフィック・プロダクト研究室

◆グラフィックデザイン、エディトリアルデザイン、タイポグラフィ

作品発表

- 第33回文化学園大学・文化学園短期大学部教員研究作品展、2018年6月
- 韓国文化院 Challenge Art in Japan、ポスター・DM・カタログ、2018年11月
- 2018年度文化学園大学特別公開講座ポスター、2019年2月

作品掲載

- 『広がるフライヤー』BNN新社、2019年1月

研究発表

- 「展覧会のグラフィックデザイン」、第52回文化学園大学学内研究発表会、2018年9月

横山 稔

◆建築・インテリア学科 教授 インテリアデザイン研究室

◆木造建築継手家具、五感のデザイン、デザイン思考、
クリエイティブ思考、オフィスデザイン

作品展

- 米国オレンジカウティ州立大学名誉客員教授就任記念 大学ギャラリー作

品展示、2017年3月

講演

- 米国オレンジカウティ州立大学名誉客員教授就任記念講演会、2017年3月

研究

- 一般社団法人東京インテリアプランナー協会 インテリア系学生への業界サポート計画及び研究、2018年3月～現在

渡邊秀俊

◆建築・インテリア学科教授 建築デザイン研究室

◆人間工学、環境心理、環境行動デザイン、建築計画、インテリア計画

学会口頭発表

- 劉当・浅田晴之・花田愛・渡邊秀俊・森田舞「ワーカーの対人認知に関する調査 立位用デスクと座位用デスクが混在する執務環境に関する研究 その1」、『日本建築学会大会梗概集』、pp.801-802、2017年7月
- 渡邊秀俊・劉当・花田愛・浅田晴之・森田舞「ワーカーの対人認知に関する実験 立位用デスクと座位用デスクが混在する執務環境に関する研究 その2」、『日本建築学会大会梗概集』、pp.803-804、2017年7月
- 吉田桃子・渡邊秀俊「アパレル店舗のファサードの空間構成と印象評価」、『日本インテリア学会大会研究発表梗概集』、pp.79-80、2017年10月
- 高橋正樹・渡邊秀俊・花田愛・森田舞・浅田晴之「執務空間における立位作業を促す視覚的効果に関する研究」、『日本建築学会大会梗概集』、pp.219-220、2018年9月

学会講演

- 渡邊秀俊「行動観察調査で何がわかる?—データから考察への繋がり」、第17回環境心理生理チュートリアル 行動観察調査における作法と技法—人の行動から心理を読み解く—、日本建築学会・環境工学委員会・環境心理生理運営委員会・環境心理小委員会、2017年9月

学内研究発表会

- 申恩泳・小柴朋子・須田理恵・河本和郎・渡邊秀俊「肌の露出における印象操作と生理反応に関する研究(経過報告)—セクシーさを分析対象に」、2018年度学内研究発表会(服装学部)ポスター発表、2018年9月

文化・住環境学研究所助成研究

- 五十嵐清子・柚本玲・西原直枝・渡邊秀俊「家庭科教育における住生活領域の現状と課題」、2018年4月-2019年3月

学外共同研究

- 渡邊秀俊・高橋正樹「執務空間において立位作業を促す視覚的効果の研究」、株式会社岡村製作所・オフィス研究所、2017年10月-2018年9月

総説

- 渡邊秀俊「私の考えるインテリア論—広げる・繋げる」、日本インテリア学会編、2018年4月

渡邊裕子

◆建築・インテリア学科准教授 建築デザイン研究室

◆建築意匠、建築設計、古民家再生、ブラジル移民住宅調査

研究発表

- 高橋正樹・井上揺子・渡邊裕子・牧野昇・佐藤百合子・北岡竜行「長野県須坂市における古民家再生プロジェクトに関する研究報告—平成29年度—」、『平成29年度文化学園大学第51回学内研究発表会 造形学部の部要旨

集』、pp.17-18、2018年9月

●渡邊裕子・高橋正樹・井上揺子「長野県須坂市の古民家を利用した実践型「ものづくり教育」その3」、『日本インテリア学会第29回大会研究発表梗概集』、pp.47-48、2017年10月

●須崎文代・田中和幸・渡邊裕子・内田青蔵「ブラジル連邦共和国レジストロ市における戦前に竣工した日本人の移民住宅 その1 沖山剛造邸の現状と窓枠の形状について」、『日本建築学会北海道支部研究報告集』No.91、pp.401-404、2018年6月

●渡邊裕子・須崎文代・田中和幸・内田青蔵「ブラジル連邦共和国レジストロ市における戦前に竣工した日本人の移民住宅 その2 天谷邸の現状と推定復元について」、『日本建築学会北海道支部研究報告集』No.91、pp.405-408、2018年6月

●田中和幸・渡邊裕子・須崎文代・内田青蔵「ブラジル連邦共和国レジストロ市における戦前に竣工した日本人の移民住宅 その3 沖山スズ邸の現状と架構形状について」、『日本建築学会大会学術講演梗概集(東北)』、pp.907-908、2018年9月

●北岡竜行・高橋正樹・井上揺子・渡邊裕子・牧野昇・佐藤百合子「長野県須坂市における古民家再生プロジェクトに関する研究報告—平成30年度—」、『平成30年度文化学園大学第52回学内研究発表会(造形学部の部)要旨集』、pp.20-21、2018年9月

●田中和幸・渡邊裕子・須崎文代・内田青蔵「ブラジル連邦共和国レジストロ市における戦前に竣工した日本人の移民住宅 その4 六川邸から見る大壁造りの窓枠形状について」、『日本建築学会関東支部研究報告集』、pp.1-4、2019年3月

科学研究費

●「ブラジル日本人入植地の歴史民俗学的研究(基盤研究(B)海外学術調査)」、平成27年度-平成30年度、連携研究者

平成の時代に終わりを告げ、新たな時代の幕開けから早くも一年が経とうとしている。わが研究室からは完成したばかりの新国立競技場を遠くに眺めることができる。2020年東京オリンピックに向けて都市が変化していく姿を目の当たりにした。今号の特集は「時代」をテーマにしたいと考えた。その時代のカルチャーを見つめてみると、当時の生活の知恵や現状を打破するための創意工夫が知れて大変面白い。

学生の作品を見ていると、ひと昔主流だったレンズ付きフィルムカメラやブラウン管テレビに魅力を感じ表現に取り入れる学生が増えている。いわゆるデジタルネイティブ世代と呼ばれる彼らは、不要とされてきたノイズやブレ、曖昧な表現をも楽しんでいる。高精細な映像や限りなく現実に近い体験などリアリティが追求される世の中で、それらを上手にミックスさせてオリジナリティを生み出そうとしているので器用だ。

社会のダイナミズムに押し潰されそうになるときもあるが、この新たな時代が豊かであらゆる多様な価値観を持つ人々が生きやすい時代であって欲しいと願ってやまない。

深田雅子

カバーフォト



畜光体に光を照射する様子



収納実験



瓦の木端立て

文化学園大学
文化・住環境学研究所報

しつらい

vol.8 2020

発行日

2020年3月20日

編集委員

牧野 昇、曾根里子、種田元晴、深田雅子

デザイン

則武 弥（ペーパーバック）

制作

左右社

発行所

文化学園大学 文化・住環境学研究所
151-8523 東京都渋谷区代々木3-22-1

TEL/FAX 03-3299-2384・2359（建築・インテリア研究室）

印刷・製本

創栄図書印刷株式会社

© THE BUNKA RESEARCH LAB FOR
DWELLING ENVIRONMENT

無断転載を禁ず

し
つ
ら
い

8

文化学園大学 文化・住環境学研究所

しつらい vol.8 2020 発行日 2020年3月20日

発行者 文化・住環境学研究所 所長 高橋正樹

〒151-8523 東京都渋谷区代々木3-22-1

発行所 文化学園大学 文化・住環境学研究所

ISSN 1880-7676